

4.6.7 ▶ 緊急消防援助隊の手記

表4.6-55に示した岩手県、宮城県及び福島県で活動した緊急消防援助隊の手記を紹介する。全国消防長会の「東日本大震災活動記録誌」や各消防本部から刊行されている活動記録誌等に掲載されている手記から、活動状況が詳述されているものや今後の教訓となるものを掲載した。

表4.6-55 緊急消防援助隊の掲載手記一覧

No.	都道府県隊	活動県	タイトル	所属・氏名 ^{*1}	出典
1	北海道隊	宮城県	隊員の強い使命感を感じた日々	札幌市消防局 消防司令長 富田 和廣	全国消防長会 東日本大震災活動記録誌
2	北海道隊	宮城県	緊急消防援助隊 ～女性隊員としての活動を振り返って～	札幌市消防局東消防署 消防士長 高橋 朋子	北海道 北海道緊急消防援助隊活動記録誌
3	新潟県隊	宮城県	忘れられない出来事	阿賀野市消防本部 消防司令補 清水 丈裕	新潟県消防長会 東日本大震災緊急消防援助隊 新潟県隊活動記録
4	長野県隊	宮城県	緊急消防援助隊	長野市消防局 消防司令補 市川 裕	全国消防長会 東日本大震災活動記録誌
5	千葉県隊	福島県	福島県消防応援活動調整本部指揮支援 部隊隊長(第1次・第4次・第7次派遣隊) として	千葉市消防局 消防司令長 小畑 博	全国消防長会 東日本大震災活動記録誌
6	東京都隊	岩手県	岩手県における航空消防活動	東京消防庁装備部航空隊 消防司令 荒谷 秀夫	釜石大槌東日本大震災活動記録誌編集委員会 「猛威への挑戦 東日本大震災－釜石大槌消防活動の 記録」
7	神奈川県隊	宮城県 福島県	陸と空からの活動	川崎市消防局 消防士長 岩佐 信二郎	全国消防長会 東日本大震災活動記録誌
8	神奈川県隊	福島県	神奈川県隊救急部隊第5次派遣隊(川 崎第1次隊)に参加して	川崎市消防局 消防司令 飯田 康行	川崎市消防局 「東日本大震災 川崎市消防局活動記録誌～2011～」
9	愛知県隊	岩手県	岩手県消防応援活動調整本部指揮支援 部隊(第1次派遣)の活動について	名古屋市消防局 消防監 伊藤 悦三	全国消防長会 東日本大震災活動記録誌
10	富山県隊	宮城県	緊急消防援助隊富山県隊長(第1次隊) 手記～第1次隊の任務～	富山市消防局 消防監 黒田 喜和夫	富山県消防長会「会報 特別号」(平成24年1月27日)
11	富山県隊	宮城県	覆された危機管理意識	氷見市消防本部 消防司令補 竹内 貞明	富山県消防長会「会報 特別号」(平成24年1月27日)
12	滋賀県隊	福島県	拡大する飛行禁止空域との狭間で	大津市消防局 消防司令 内田 建児	全国消防長会 東日本大震災活動記録誌
13	大阪府隊	岩手県	貴重な体験	泉佐野市消防本部 消防士 山内 雅之	大阪府下消防長会 「東日本大震災緊急消防援助隊－大阪府隊活動記録－」
14	兵庫県隊	岩手県	私が見た東日本大震災	兵庫県消防防災航空隊 消防司令補 廣井 紀吉	釜石大槌東日本大震災活動記録誌編集委員会 「猛威への挑戦 東日本大震災－釜石大槌消防活動の 記録」
15	兵庫県隊	新潟県	最前線へ一刻も早く物資を届けな いと...	神戸市消防局東灘消防署 岡 孝夫	南三陸消防署・亶理消防署・神戸市消防局 「東日本大震災 消防隊員死闘の記」
16	広島県隊	宮城県	東日本大震災における施設課の対応等 について	広島市消防局 消防司令 中島 輝文	広島市消防局「東日本大震災 活動記録集」
17	広島県隊	岩手県 福島県	被災地の空	広島市消防局 消防航空隊 消防司令 バイロット 小笠原 光峰	広島市消防局「東日本大震災 活動記録集」
18	山口県隊	宮城県	長い道のり	下関市消防局 消防司令長 山内 和夫	全国消防長会 東日本大震災活動記録誌
19	福岡県隊	宮城県	東日本大震災に出動して	福岡市消防局 警防部警防課長 山下 周成	福岡市消防局 「東日本大震災 緊急消防援助隊福岡県隊(福岡市隊) 活動記録」
20	熊本県隊	宮城県	熊本県緊急消防援助隊救急隊活動報告 ～この悔しさを今後～	熊本市消防局 消防司令 池松 英治	全国消防長会 東日本大震災活動記録誌
21	宮崎県隊	岩手県	目の当たりにした未曾有の大震災と釜 石大槌地区での活動	宮崎県防災救急航空隊 加藤 啓一郎	釜石大槌東日本大震災活動記録誌編集委員会 「猛威への挑戦 東日本大震災－釜石大槌消防活動の 記録」

*1 所属、役職、階級等は東日本大震災にて対応した当時のもの

隊員の強い使命感を感じた日々

札幌市消防局（北海道）
消防司令長
富田 和廣



平成23年3月11日（金）14時46分、東北地方の三陸沖を震源とするマグニチュード9.0最大震度7の大地震が発生した。

あの大地震の後、テレビに映し出された映像に日本中の誰もがくぎ付けになったに違いない。

この映像はCGではない。今、日本の国内で現実に起こっている、これまで見たこともない想像を絶する、恐ろしい惨状の生中継だった。

東北地方の海岸や漁港に大津波が押し寄せ、家屋、田畑が次々と津波に飲み込まれていく。

消防署内では、画面のなかで逃げ惑う人や車に向け、「そっちじゃない、反対側に逃げろ」などと思わず叫んでいる署員もいた。

まもなくして緊急消防援助隊北海道隊の編成から出発日時が決められるなか、第1次派遣隊の隊長の任を受けることとなった。その瞬間、頭をよぎったのは「この派遣は、これまで経験した緊急消防援助隊のブロック訓練とは比較にならない。現実に起こった困難かつ大規模な災害にこれから向かい、予想だにしない極めて過酷ななかで活動することになる。」との思い。

顔は平然としていたと思うが、気の高ぶりと同時に様々な不安を抱えながら、派遣隊員と準備を進めたことを今でも覚えている。

翌12日に派遣隊15隊64名による札幌市長への出発報告を終え、札幌～小樽～秋田～宮城までの



活動の場所：宮城県石巻市

陸路・海路、さらに陸路を経て長距離・長時間にわたる移動の末、石巻市の進出拠点である総合運動公園には13日夜半に無事到着することができた。

もちろん、早期の被災地到着を目標に活動地域の指定が不明のまま出発しており、結局、翌日の秋田港接岸の数時間前に「活動地域は宮城県石巻市」と決まったのだが、長時間にわたる移動時間を考えると、このようにいち早く派遣隊を先発させる判断も重要になってくる。

このことは、一刻も早く大量投入された消防、

自衛隊などの車両部隊を、被災地の住民の方々が目にする事で安堵感や安心感、そして期待感につながることになるのではないだろうか。

車両で移動している日中には気付かなかったが、目的地である石巻市に近づくにつれ日没となると、市街地は停電のため真っ暗、赤色灯を点灯しながら走行していると、闇夜に赤色が吸い込まれていく。暗く不気味なほど静寂なこの環境のなかで住民が不自由な避難生活をしていると思うと「早く何とかしてあげたい。」と念じずにはいられませんでした。

石巻地区広域行政事務組合消防本部で毎朝行われる調整会議、机上の図面上に「つば」が飛ぶほど議論が交わされる。これも「何とかしたい。」という人命救助・救出にかける真剣な気持ちが表れている証だ。

活動初日、災害現場までの途上も障害物を排除しながらの移動で大変だったが、被災した現地は、打ち上げられた船舶、転がっている危険物の屋外タンク、基礎だけ残っている住宅跡、敷き布団のようにめくれあがったアスファルトなど、これまでの災害では見たことのない惨たんたる現場。衝撃的な光景を目の前にして、隊員たちはブロック別に分けた検索区域を「生存者の救出・救

助」という使命感と派遣隊員としての誇りを持って最後まで活動し、結果、派遣期間中（7日間）に17人に及ぶ生存者救出・救護、70人超のご遺体の確認・収容、別動していた救急隊により49人を搬送するなど第1次派遣隊としての役割を果たせたと思う。

しかし最終日、第2次派遣隊に引き継ぎ石巻市を去るとき、何かもっとできることはなかったか？ やり残したことは？ などの自問を隊員誰もが頭に描いていたに違いない。とはいえ、連日に及ぶ過酷な活動のなか、決して十分とは言えない食・住の環境において、文句ひとつ言わず業務を遂行し、さらに大きな事故や負傷者も出さずに無事帰札できたことは、素晴らしい仲間にも恵まれたおかげと改めて感謝するとともに誇りと思っている。

北海道の派遣は第13次まで行われたが、この経験をこれからどう活かしていくのか。

その大きな課題にスピード感を持って解決策を導き出す役割が我々に課せられている。

最後になりましたが、「東日本大震災」において犠牲になられた多くの方々のご冥福を祈るとともに1日も早い復興・復旧をご祈念申し上げます。



石巻地区広域行政事務組合消防本部にて(調整会議)

緊急消防援助隊 ～女性隊員としての活動を振り返って～

(救急部隊 第11次派遣)
札幌市消防局東消防署 (北海道)
消防士長
高橋 朋子



私は第11次派遣隊の救急隊員として石巻市に入りました。同次派遣隊の3名の女性隊員のうちのひとりでした。

被災地での救急活動では、数家族が集まって暮らしていた住宅の中で発電機を使用していたためにCO中毒になってしまったというものや、被災と避難所生活でのストレスからと思われる吐血など、救急要請に至る経緯が被災によるものが多く、被災の被害は直接的なものだけではなく、被災された方々にとって継続しているものなのだと痛感しました。

特に印象に残っているのは、ある出動で同乗したご家族が車酔いをする方だと伺ったので、なるべく気を紛らわせてもらおうと思ってお話しをしていたら、病院到着のときに「こんなときに言うのも変だけれど楽しかった。おかげで車酔いせずにすんだよ。ありがとう。」と言われたことです。

女性隊員には力が弱いなどのデメリットがあります。

しかし、女性の傷病者はもちろん、男性や関係者に対しても与える安心感は女性隊員特有のものがあり、女性隊員のメリットだと思っています。このとき、そのメリットが活かされたと感じました。

私たちの活動では、安全性や的確性、そしてスピードが求められますが、要救助者や傷病者やその関係者に対して、どんな時でも、どんな場所でも、柔らかな言葉や心配りのある対応が欠かせないと思っています。

被災された方々は極度のストレスを抱えており、より心配りのある対応の重要性を改めて感じ、微力ながらも女性隊員のメリットを活かして活動できたと思っています。

傷病者に寄りそう心配りのある活動の重要性という基本に立ち返る機会を被災された方々に頂いたと感じています。

今後は通常の活動や被災地の支援などでお返しをしていきたいと思っています。

緊急消防援助隊の手記 (3) (宮城県 新潟県隊)

忘れられない出来事

(救急部隊 第5次派遣)
阿賀野市消防本部 (新潟県)
消防司令補
清水 丈裕



それは20時47分「30代男性、転倒し頭部からの出血あり、阿賀野救急隊出動せよ」との救急指令を受け出場した事案です。石巻消防署でナビゲーターを同乗させ現場へと向かいました。現場は一目で飲食店であることが確認でき、道路から入口まではがれきが散乱していました。店内は床に泥が堆積し段ボールが敷かれ、テーブルや椅子は乱雑に置かれていました。小上がりで仰臥位の傷病者と接触すると、泥酔し「大丈夫、大丈夫。」と繰り返すだけでした。観察の結果、左前額部に5cmの血腫と擦過傷が確認されました。傷病者が泥酔状態のため同級生だという店主から受傷状況を聴取すると、泥酔しがれきに頭から倒れこんだということでした。私は「なんで震災のこの時期にこんなになるまで飲酒させたのですか？」と店主に対し注意の意味も込めて尋ねると、店主は「彼の両親がずっと行方不明で、今日遺体が発見され、覚悟をしていたとはいえ申うこともできない状況なので友人数名でお通夜の代わりに励まし

ていたんです。」ということでした。確かによく見ると傷病者の頬には涙が乾いたような跡があり、私は思わず言葉を失いました。そして、改めてここが被災地であることを再認識しました。今一度泥酔している傷病者に目をやると両親を亡くした悲しみや、申うことすらできない無念さがあったのだと思いました。その後、医療機関へ搬送中に傷病者の友人たちから感謝の言葉をいただき、私はもっと被災地の住民への配慮が必要であったと思いましたし、報道では伝わらない苦しさや悲しさを感じることができました。

緊急消防援助隊新潟県隊第5次隊の一員として現地で活動し、東日本大震災の被害の大きさに驚くとともに、被災地の住民の方々の懸命に生きる姿を目の当たりにして、一日も早い復興を願わずにはられません。微力ではありましたが、今回の活動を通じ少しでもお役に立つことができたのであれば誇りに思います。

緊急消防援助隊

長野市消防局（長野県）
消防司令補
市川 裕



ドライスーツに身を包み、腰まで、時には胸まで水につかりながら浸水した市街地を救命ボートを引きながらの搜索。自分の身長を遥かに超える高さまで浸水した跡が建物の壁に残っている。車が道路を塞ぐように折り重なっている。「誰かいませんか？」呼び掛けると押し流されたがれきのなかに人の体の一部が見える。向こうにも見える。車のなかにも居る。車の下にも居る。しかし誰の返答もない…。

平成23年3月11日（金）14時46分。三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の巨大地震、そして巨大津波。東日本大震災。

救助隊員である私はこの日、当直勤務で2階の事務室で執務中でした。僅かな揺れを感じ、とっさに身構えると強く長い横揺れ。あわててテレビをつけ地震の情報を確認すると「宮城県で震度7」の字幕。遠く離れた長野県でこんなにも揺れるものなのか？ これは大変な地震が起きてしまった…。

緊急消防援助隊の出動があるかもしれない。隊員に個人装備の確認を指示。地震の情報を確認するが「広範囲に大きな被害が出ている模様」としか情報は入ってきません。

地震発生から約2時間後、緊急消防援助隊長野県隊の出動要請。18時に、被災地宮城県に向けて出発しました。

通行できる道を確認しながら新潟県経由で進行。日付も変わり福島県に入ったところ徐々に被害



活動の場所:宮城県多賀城市、七ヶ浜町

情報が入ってくる。「仙台市若林区の海岸に遺体が100体ほど打ち上げられている。」「福島県南相馬市で家屋が1800戸流出」「大規模な火災が発生し市街地が直径500mから1kmの範囲で燃えている。」耳を疑うような情報に震災の規模の大きさを想像する。さらにラジオから「緊急地震速報」が。救助工作車を運転する隊員に減速しハンドルを取られないよう注意を促すと「長野県北部で震度6強を観測」…「何～!」「え～?」言葉にならず、ただただ驚くのみ。被災地に向かう自分たちの街も被災地になってしまったのか。高速道路の一本道。戻るわけにもいかず、そのまま進行。携帯電話も圏外を表示し全く使えず家族とも連絡が

取れない。無事であってくれと祈るばかりでした。

しばらくすると本部から連絡が入り、同じく東北に向かっている兵庫県と奈良県の緊急消防援助隊が長野県に向かってきている。北部の栄村を中心に建物被害は発生しているが人的被害はない模様との情報。見事な連携プレーと機動力の高さを感じました。そしてこの時、「長野県隊の進出先は宮城県塩釜地区消防事務組合消防本部で、管轄する多賀城市・七ヶ浜町で津波による大きな被害が発生している。」と伝えられました。

高速道路を徹夜で走り15時間。距離にして約500km離れた東北の地によく到着した。

活動拠点に入り被害状況を確認。「多賀城市街地は沿岸から約2kmが津波でほぼ浸水。七ヶ浜も沿岸が壊滅的な被害を受けている。遠く立ち上がる黒煙は石油コンビナートのガス施設で出火。手がつけられない状況である。」と聞かされました。

多賀城市内はまだ浸水しており、ボートによる救助活動が必要とのことから県隊を2班に分け活動することとなり、私達は多賀城市へ向かいました。

市街地の一段高くなった道路は水が引け、避難者が列を作っている。しかし道路上には押し流された車が何台もあり、そのなかには消防車やパトカーの姿も。地元本部の救助隊長から「避難誘導中に津波が見えたと思ったらあつという間だった…」さらに津波が一瞬であったことを伺わせるかのように街のなかには津波に飲み込まれ、亡くなってしまった人の姿が多くありました。生存者の救出を優先させるため遺体収容は後回しとしました。ご遺体をそのままにしておくのは抵抗もありましたが、圧倒的に消防力が劣勢で、これが災害現場なのだ自分に言い聞かせ、心のなかで「後で必ず来ますから。」とご遺体の近くに目印を付けその場を去り次の現場へと向かいました。

民家の多くは体の不自由な人やお年寄りが浸水により取り残され救助を待っていました。建物の1階は津波で窓が割れ、玄関には流された車が



浸水による救助救出状況

突っ込んでいます。室内は家具が散乱しており泥まじりの黒い水が引けていない状況で、このお宅では足の不自由なおばあちゃんを何とか2階まで避難させたとのことでした。

夕刻になり孤立住民の捜索も一段落すると夜間の活動は避難路が確保できず2次災害の恐れのあることから中止とされました。日のあるうちに行えるだけご遺体の収容を行い、後ろ髪を引かれる思いでしたが現場を引揚げました。

余震の続くなか、活動拠点での仮眠。翌朝からは七ヶ浜町へと転戦し活動。ここもまた壊滅的な被害を受けており視界に入る全てのものが破壊されている。家屋はバラバラになり柱や板になっている。それでも生存空間を探しながら捜索を実施。その日の夜には交替の派遣隊も到着し私達は被災地を後にしました。

今回のような想定を遥かに超える大きな地震は広範囲に被害が発生しました。緊急消防援助隊として市町村や県を超え全国の消防機関が被災地に駆け付け活動を実施。救助活動は時間との闘いで、遠く離れた長野県から出動し翌日には活動を開始することができ、想像もつかなかった複数箇所での地震発生にも柔軟に対処し、お互いのバックアップ体制も取れたことは大きな成果であったと思います。我々が活動を行ったのはほんの短時間ですが、被災された方々は長期戦です。亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、1日も早い災害の終息と復興を心からお祈りいたします。

福島県消防応援活動調整本部指揮支援部隊長 (第1次・第4次・第7次派遣隊)として

千葉市消防局 (千葉県)
消防司令長
小畑 博



千葉市消防局は、震災当日の平成23年3月11日(金)から6月6日(月)の活動終了まで、延べ88日間にわたり東日本大震災の被災地である福島県災害対策本部に指揮支援隊を派遣、私は、第1次・第4次・第7次派遣隊として福島県に出動し指揮支援活動を実施してまいりました。

以下は、私が出動に至った経緯及びその後の指揮支援に従事した活動内容です。

3月11日に発生した東日本大震災当日は、被災地から遠く離れている千葉市においても震度5強の揺れを感じ、消防局内の消防地震対策本部で警戒課員として情報収集活動を実施しているさなか、消防庁長官から福島県への出動指示があったと伝えられました。

直ちに隊員とともに必要資器材と個人装備をまとめ、千葉市消防局指揮支援隊第1次派遣隊として千葉市消防局航空隊「おとり1」に搭乗、17時17分に千葉市を離陸、一路福島空港へ向かいました。

福島空港へ向かうヘリコプターの機内では、海岸線から離れた内陸部を飛行中のため、上空から大きな被災状況を目にすることはありませんでしたが、高速道や国道等で赤いテールランプが彼方まで続く、長い渋滞を目にしました。

18時20分に福島空港に着陸し、その後、地元須賀川地方広域消防本部の緊急車両により、約70km離れた福島県災害対策本部に向かう途中、



活動の場所:福島県福島市

激しい渋滞に巻き込まれながら約3時間余りを費やし21時15分に到着しました。

本来であれば福島県庁内に設置されるはずの災害対策本部が、庁舎被災のため、隣接する「福島県自治会館」内に設置されており、その後の延べ88日間にわたる指揮支援活動のスタートに立ち会うこととなりました。

福島県災害対策本部の組織は、総括班を筆頭に情報班・原子力班・住民避難班・救護班など合計9班とそれらに加えて自衛隊、警察、消防などの関係機関で構成されています。

消防機関である消防応援活動調整班は、福島県

と代表消防本部である福島市消防本部、福島県防災航空隊、総務省消防庁そして千葉市消防局指揮支援隊で構成されています。

被災直後の大混乱の喧騒のなか、消防応援活動調整本部で地元福島市消防本部とともに指揮支援活動を担当しましたが、当初は、被災地との通信途絶状態が頻繁にあり、被災情報や部隊情報が非常に乏しいなか、おおむね72時間といわれている生命救助のタイムリミットと津波警報発令下における安全確保を勘案しながら、部隊運用方針の決定を求められました。

その後も立て続けに起きた福島第一原子力発電所原子炉建屋での水素爆発や放射能汚染による避難指示範囲の段階的拡大など、想像を超える状況のなかで、活動隊員の被ばく防止と津波対策を含めた安全管理対策を最大限今日慮しつつ、生存救助を目指すという非常に困難な決断を、再三求められたことを記憶しています。

各県の第1次派遣隊は、情報不足から放射線防護用資器材を十分に装備していなかったため、活動地域の制限をせざるを得ず、一部の避難指示範囲内においては、速やかな人命救助活動の手を差し伸べることができなかったことは、非常に残念な思いであります。

救急搬送については、自衛隊救急医療チーム等との連携に加え、福島第一原紙慮発電所から半径20～30km圏内とその周辺地域の病院・福祉施設等からの患者搬送を緊急消防援助隊の救急部隊が担当しました。

また同20～30km圏内の在宅巡回診療実施に際し、緊急消防援助隊の救急救命士を各チームに同行させ、搬送が必要な場合の連絡調整員として搬送活動支援を行いました。

福島県内の緊急消防援助隊の救急部隊は、一時は最大数で10都県からなる107台の救急隊で搬送活動に従事しましたが、150名を超える救急搬送オーダーや出動から野営場所に帰るまでが14時間を超える県外への長距離搬送、その際の給油場所や酸素充填場所の確保、容態急変時のバックアップ体制確保など、通常では発生し得ない問題が予測されたため、その都度、関係機関に協力を求めつつ事前対策を講じてまいりました。

指揮支援隊は直接災害現場で活動する部隊と異なり、悲惨さを目撃する機会は多くありませんが、被災状況に基づく効率的な部隊運用に際し、あらゆることを想定し、迅速、的確な判断と決断力が求められる非常に重要かつハードな部門でした。

今を振り返れば、貴重な体験・教訓とともに反省点の多い活動となってしまいましたが、近い将来、発生が危惧されている首都直下地震など、千葉市が被災した場合の対策として、これらを生かしていきたいと考えております。

最後になりますが、今回の東日本大震災で犠牲となった方々のご冥福を深くお祈りいたしますとともに、被害にあわれた皆様に心からお見舞い申し上げ、被災地の一刻も早い復旧・復興を願って止みません。



福島県消防応援活動調整本部内の状況

岩手県における航空消防活動

東京消防庁装備部航空隊 (東京都)
消防司令
荒谷 秀夫



3・11の日、私は岩手県二戸市の実家に帰省していました。到着してまもなく、大きな揺れが長く続き、すぐに停電、揺れが小さくなったかと思うと再び大きな揺れが続くという初動があり、これは尋常ではないと感じました。そして、情報が入ってくるに伴い、被害規模に驚愕し、今の状況にどう対処すべきかを冷静に考えました。

東京に参集する手段は陸・空路ともに閉ざされていました。停電は復旧することなく、ラジオからの情報では、岩手県をはじめ東北地方での津波被害と東京でも大きな被害が出ていることを知りました。電話は不通であり、深夜になり航空隊とメールが通じ、花巻空港に参集し、当庁ヘリの受入れと活動調整任務の連絡を受けました。

余震が頻発し、不眠のまま翌朝に花巻空港の岩手県防災航空隊に到着しました。騒然としていることを予想していましたが、整然としているというのが第一印象でした。あとで知ったことですが、岩手・宮城内陸地震の教訓を活かし、震災時の対応を練り直していたとのことでした。その後、当庁ヘリ、他県応援ヘリも集結し、一日あたり約15機の消防防災ヘリが連日活動していたと記憶しています。その中で、県警ヘリや自衛隊機などとの調整も図りながら、岩手県防災航空隊長以下少ない隊員で的確に統制されており、受援体制のあり方について参考となることが多くありました。

釜石大槌地区も含め、沿岸部での非現実的な光景を見て真っ先に感じたことは、津波が根こそぎさらっていった跡の「寂寥(せきりょう)感」でした。そして、津波の到達位置の境界がまさしく「生死の境」であり、津波被害が繰り返された岩手で育った私でも、改めて少しでも高い場所への避難が最重要であると感じました。

過去にも震災現場の活動経験はありますが、この震災は経験をはるかに上回るものであり、活動を通じて感じたことは以下のとおりです。

1 ヘリの機動性を活かす

被災地との連絡手段が途絶し、救助を求める通報をしたくてもできない。具体的な救助要請が確認できなくても積極的に現場に出て、検索しつつそのまま救助に移行することも有効である。

2 前進基地の設定

被災地域の近くに燃料補給が可能な臨時離着陸場が設定できれば、運航効率が向上する。(燃料手配から搬送手段、現地隊員の配置など課題は多い。)

3 被災者目線での先を読む力

時間経過に伴い、被災者のニーズは変わってくる。地区ごとの環境や気象条件なども考慮

し、先読みした活動方針の決定や救援物資の事前手配が必要である。(後手にならないこと。)

4 航空部隊の展開と安全管理

現場での隊員は使命感にあふれ士気旺盛であり、非常に心強い活動をしてくれる。一方で、活動は長期戦であり疲労が蓄積していき、その疲労は航空事故に直結する。交替要員のいない現場では、普段以上に体調管理に配慮することが結果的により多くの被災者救助に繋がる。



最後に、釜石大槌地区の消防職員、消防団員の皆様をはじめ岩手の多くの消防関係者の皆様には、地元での活動で奔走している中でもヘリの運航に多くの支援をいただき、私達も無事故で活動することができたと思っています。一日も早く、3・11以前よりも美しい自然と町並みの岩手に復興できるよう頑張ります。



陸と空からの活動

川崎市消防局 (神奈川県)
消防士長
岩佐 信二郎



川崎市では今回の東日本大震災において、陸上部隊、救急部隊及び航空部隊、さらに福島第一原子力発電所への消火部隊の派遣と、約2か月間にわたり総勢75隊254名(延べ総数)が緊急消防援助隊として派遣されました。

私は3月に陸上部隊で宮城県へ、4月に航空部隊として福島県への派遣を命ぜられ、陸と空からの活動に従事しました。

宮城県へは神奈川県隊第3次派遣隊として3月17日(木)8時30分に川崎市を出発し、所々亀裂が入り隆起した東北自動車道を、緊急車両だけの異様な雰囲気の中仙台市宮城野区へ向かい、牡丹雪が一面降り積もる23時30分進出拠点に到着しました。その翌朝から、津波被害が甚大であった若林区の仙台東部道路から、ご遺体が多く流れ着いた荒浜に渡って付近一帯の搜索活動を実施しました。

田畑には海水が溢れ、堤防にもなっていた仙台東部道路まで家々が集落ごと流されており、ひざ上まで泥水に浸りながら、倒壊家屋や流され重なった車両の山の搜索を一つ一つ行いました。2階部分しか残らない民家の屋根をはがしたとき、そこにあったのは震災前まで平穏に流れていた生活そのもので、学習機には写真が飾ってあり、ノートが開いたままでした。「どうか無事に避難してしてくれ。」そう思いながら、一方で「絶対に見つめますから。」と救助を待つ要救助者を血



活動の場所:宮城県仙台市、福島県

眼になって捜しました。荒浜地区での任務は防風林内での搜索でした。松の大木が数キロにわたって根こそぎなぎ倒されている光景は想像を絶するもので、辛うじて立っている木は、地上から10m近くまであるはずの枝が無い。その先には布切れや布団が引っ掛かっていました。「あの高さまで水が来たのか。」防風林の手前に位置する仙台市消防局ヘリポートでは、消防車両やヘリコプターが押し流され積み重なっており、津波のすさまじい威力を目の当たりにして、絶句しました。残念ながら生存者等発見することはできず、悔しい思

いと不甲斐ない気持ちがいっぱいそのまま派遣が終了となりました。

仙台から戻り4月1日の人事異動で警防部航空隊勤務となり、4月6日から今度は航空部隊として1か月間に計3度、福島県に派遣となりました。航空部隊の任務は、福島第一原子力発電所から半径30km圏外の救急搬送、がけ崩れ・市街地等の地震被害調査及び林野火災の消火活動等でした。

飛行する際は、各クルーが放射線防護装備を着装しての活動となり、ゴーグルによりパイロットの視界は制限され、クルー全員が機体の目となり飛行し、また、飛行後も整備士や救助員が機体及び身体の汚染管理等、未経験の活動でしたが、陸上部隊での派遣時同様、隊員の士気は高く安全飛行に努めました。

派遣期間中は何度か大きな余震があり、その度に他の航空隊と連携して上空から県内の被害状況の情報収集を実施し、地上消防本部への情報提供を行いました。また、相馬市からいわき市へ救急搬送を実施した際、機体からほんやりと遠くに福島第一原子力発電所が見えたのを憶えています。海岸線は内陸部まで水が残り、一帯が茶色く、それ以外の色を失ってしまっているような印象を受け、青く晴れ渡った空と対照的で複雑な気持ちでした。山間を縫うように飛行し、強風のなか、救

急搬送を無事完了、帰投した直後に今度は林野火災出場の下命を受け出場。空中消火装置を装備するため飯館村のグラウンドに着陸したとき、機内の線量計の数値に衝撃を受けました。防護体制は十分でしたが、目に見えない放射線の怖さを実感した瞬間で、自然の脅威と、福島第一原子力発電所の脅威をともに肌で感じた派遣活動でした。

今回の大震災への派遣は偶然にも陸と空からの派遣となり、計17日間にわたるものでした。そのなかで印象深かったのは活動中や宿泊先で声を掛けてくれた被災者の方たちの言葉と、受援隊であった仙台市消防局、福島県防災航空隊の皆さんの言動でした。家族がまだ見つからない職員の方、家族を亡くされた職員の方もいらっしやると聞いていました。発災時からの活動内容や経験談を嫌な顔一つせずに話して下さった職員の方もいます。被災地の方には活動中すれ違うたびに「ありがとう」「ご苦労様」と声を掛けていただきました。避難していた福島の小学生は「頑張ってくださいね!」と元気に言ってくれました。その声に何度も励まされ、勇気付けられました。

亡くなられた方のご冥福をお祈りするとともに、支えて下さった皆さんに感謝し、今度は私達から声援を送りたいと思います。

「負けるな、東北。がんばろう、日本。」



ヘリコプターによる消火準備

神奈川県隊救急部隊第5次派遣隊 (川崎第1次隊) に参加して

川崎市消防局 (神奈川県)
消防司令

飯田 康行

川崎第1次隊の指揮隊長として派遣されました。この救急部隊の任務は、福島第1原発から半径20～30km区域内の在宅介護者のうち、巡回する医療チームが必要と認めた方々を救急搬送するというもので、メインターゲットとされた地域は南相馬市でした。南相馬市は、被災後20日経過したにもかかわらず、行方不明者が1,141人と福島県で最も多い地域となっていました。また、本市部隊の派遣期間は、平成23年3月31日から同6月6日まで、延べ派遣隊及び隊員数は33隊78人となりました。現地での活動は3つの中隊を編成し救急要請に対応するもので、第1中隊は横浜を中隊長とし、座間、綾瀬で編成、第2中隊は川崎を中隊長とし、横須賀、三浦、平塚、茅ヶ崎、藤沢、第3中隊は相模原を中隊長とし、秦野、厚木、大和、伊勢原、海老名で編成されました。

このたびの派遣は、川崎隊としては第1次派遣となり、先遣隊の意味合いが強く、現地入り当初から、宿営地の調整・設定や神奈川県隊本部、福島県災害対策本部からの情報収集が主な活動となりましたが、宿営地となった福島県消防学校から

南相馬市までのルート、目標物、走行時間、危険箇所（凍結、落石、急カーブ等）、放射線量を明記したマップを翌日には作成でき、神奈川県隊の教養資料として活用することができました。現地入り後、わずかな時間で、放射線を測定しながら本市救急隊が約140km実走行し手作りしたマップであり、不慣れな地で活動する各隊員の2次災害防止等に大変有効であると本部から評価をいただきました。こうした活動が事故なく瞬時に実施できたことも日頃の現場活動に裏付けられた各隊員の総力の賜物と考えられ、また、県下消防本部の結束の強さも大いに発揮されたことと思います。

福島県災害対策本部の受援体制も垣間見ることができ、本市における今後の対応についても参考とさせていただく事柄も多く更なる組織体制等の強化の必要性も感じました。

派遣時にお世話になった皆様大変ありがとうございました。被災された皆様の一日も早い復興をお祈り申し上げます。

緊急消防援助隊の手記 (9) (岩手県 愛知県隊)

岩手県消防応援活動調整本部 指揮支援隊(第1次派遣)の活動について

名古屋市消防局 (愛知県)
消防監
伊藤 悦三



初めに、今回の大震災の犠牲となられた数多くの方々のご冥福を心からお祈りするとともに、被災地の1日も早い復興を改めて祈念申し上げます。

次に、活動のなかでポイントとなったこと、今後の課題として感じたことについて、以下に記述します。

【緊急消防援助隊活動地域の振り分け及び活動拠点の確保】

岩手県庁災害対策本部に到着し、県内被災の概況説明を受けた時点の岩手県三陸沿岸部のほぼ全域にわたる被害の状況から、沿岸部を5つの地区にわけ、被害の大きさと派遣部隊数のバランスをできるだけ考慮して振り分けることを方針として、順次派遣されてくる部隊をそれぞれの地区に配備した。ただ、持参した衛星携帯電話が県庁の地域衛星通信ネットワーク電話等を使うのだが、3月14日くらいまではとにかく通信状況が非常に悪く、苦勞を強いられた。

消防応援活動調整本部としては与えられた県隊をバランスよく投入することが重要なポイントであったが、一口に県隊といっても、大阪府隊のように104隊もの大所帯もあれば、10数隊の県隊もある。これらを被害規模に併せて、大きなアンバランスが生じないように割り当てを決めていく作業を困難にしたのが活動拠点(野営場所)の確保



活動の場所:岩手県盛岡市

だった。三陸沿岸では、活動拠点となり得る公共施設等は狭い海沿いの平野部に集中していたため、その多くは津波により損壊した。そして、残っている施設は、避難所としての利用も必要となった。活動拠点を各指揮支援隊長と地元消防本部の了解を得てなんとか確保していったが、その調整に難航し一時的な進出拠点での待機や他の被災地へ転戦させる判断が必要になった場面もあった。

【緊急消防援助隊の誘導】

全国から集まる各県隊の移動ルートや誘導については、岩手県代表消防機関である盛岡地区広域消防組合消防本部と協議して決定していった。まず、進出拠点については、給油可能な前沢SAに統一し、投入被災地ごとに下りるICを決定。そこから被災地までは受援消防本部が誘導する体制にした。降雪期の出動のため、凍結や降雪がひどい場合には参集部隊に峠の手前で一時待機を指示するなどして、雪に慣れていない県隊でも安全に移動できるよう配慮したが、それが的確に行えたのは受援消防本部のアドバイスがあったからだ。

【関係機関との連携】

宮古市から大槌町を中心に発災直後から同時に多数の林野火災が発生したが、津波による道路寸断で陸上の消火部隊の進入が困難な現場が多く、消火の主力はヘリコプターに頼らざるを得なかった。そこで、航空チーム及び自衛隊と協議し、大量放水が可能な陸自の大型輸送ヘリ（チヌーク）は優先的に林野火災対応とし、消防・防災ヘリは救急・救助活動を重点的に行う形にした。

救急に関して、岩手県では複数のヘリコプターが着陸可能な花巻空港及び岩手県消防学校にSCU（広域搬送拠点医療管理所）を設置。孤立した傷病者をSCUにヘリコプター搬送し、そこから救急隊が陸路で病院に搬送するのだが、地元の救急隊だけで追いつかず、異例ではあるが一部の県隊から救急隊を配置することとした。緊急消防援助隊の県隊は県隊長の指揮下で活動するのが原則であることから調整に難航することもあった。また、14日頃になると被災地の病院から内陸部の病院に転院させたいという要請が多数きた。転院搬送要請があれば、消防活動を理解している災害対策本部医療チームの医師が積極的に要請病院との調整を引き受け、的確な指示を出してくれた。

【今後の課題として感じたこと】

1 愛知県、名古屋市の受援体制の構築

岩手県災害対策本部の運営を見て、さすが以前に大規模地震を経験している本部だと思えるところが端々にあった。愛知県、名古屋市は、今までは自分達が応援出動するケースが多かったが、これからは今回の教訓を活かして、受援の体制をきちっと構築していく必要がある。また、今回の災害では、「想定外」がキーワードになったが、愛知県庁と名古屋市役所は隣り合ったところであり、災害が起これば共倒れになる。もし、ここで直下型地震が起こったらどうなるか？ 全国から来ていただく部隊を統括指示する場所がない事態が発生する。県庁から離れた場所に、例えば、三河地方の県庁舎に緊急消防援助隊をサポートできる2番手の体制を作っておく必要性も検討すべきである。

2 通信の確保

今回の災害では発災後の通信環境の悪化に大変苦労をした。岩手県では一時期、自衛隊（通信部隊）に頼んで要所要所や県庁に高出力の発信ができるアンテナを備えた通信車両を配置してもらい、通信インフラの不足に対処した。これからは、こうした不測の事態に備え、今以上に自衛隊の力を借りられるような体制を検討してはと考える。

また、県の災害対策本部など活動の拠点となるような庁舎には、屋上に衛星アンテナを立てて拠点となる部屋の中に同軸ケーブルを引き、衛星携帯などが明瞭に交信できるようにすると良い。



岩手県庁災害対策本部

緊急消防援助隊の手記 (10) (宮城県 富山県隊)

緊急消防援助隊富山県隊長
(第1次隊)手記 ~第1次隊の任務~

指揮部隊
派遣期間：第1次隊 3月11日から3月14日 4日間
富山市消防局 (富山県)
消防監

黒田 喜和夫



【出動準備】

3月11日。15時少し前。警防課長であった私は、自席でわずかな揺れを感じ、直後に課員の携帯電話が次々に鳴り出しました。メールは、宮城県北部で震度6強の地震を知らせています。テレビでは、東北地方の広い範囲で被害が出ていると繰り返していました。

私の緊急消防援助隊の活動は、この時から始まりました。

宮城県は富山県隊の出動準備区域です。日頃から県隊長として、いつ出動指示が出ても絶対に遅れがあってはならないと出動計画書等を手元に置き、また心の準備を整えていたつもりでしたが、テレビに映し出されるとてつもない被害を予感させる映像に思考は空回りしていました。

これではいけないと気持ちを切り替え、消防庁からまだ何も連絡はないものの、課員に各消防本部へ出動可能隊の確認、後方支援本部の設置、富山市隊の出動準備、署に対し出動隊員の指名と自宅待機など頭をフル回転させ指示しました。課員は分担し、手際よくこれらの準備を進めてくれました。

結果的には、この初動が富山県隊の出動の早さにつながり、多くの人を救うことができたひとつの要因になったものと思っています。

その後、各消防本部から出動可能隊数が報告され、また消防庁からも富山県隊に「待機」の指示

がありました。その間にテレビの映像は、更に緊迫度を増しており「出動」を覚悟しました。

15時58分。消防庁から富山県隊の出動可能隊は全て出動するよう指示がありました。とにかく宮城県に向かえというものです。

各消防本部へ出動の連絡を終え、マイカーにいつも積んでいる3日分の着替えなど一式が入っているリュックを取り出し、慌ただしく集結場所の越中境PAへ向かいました。

【部隊移動—宮城へ】

集結場所で全隊が到着するのを待っている間に、消防庁から進出拠点は仙台南郵便局、活動場所は仙台市と具体的な指示がありました。

18時40分。富山県隊17隊68名の出発です。

この時、部隊移動していたのは、富山県隊の他は東京消防庁、新潟県隊、長野県隊だったと記憶しています。

県隊指揮車の携帯電話には、他県の指揮支援隊長や県隊長の電話番号が登録されており、今回の出動途上でも有効に活用できました。

北陸自動車道の黒埼PA付近を通過中に、東京消防庁の指揮支援隊長から電話があり、富山県隊の活動場所が名取市に変更になったとのことでした。

また、磐越自動車道の磐梯山SA付近を走行中には、名取市に指揮支援隊が到着していないため、富山県隊が代行するよう指示もありました。

このように走行中にも新たな情報や指示が入りましたが、具体的な被害の状況はつかめませんでした。また、これらの情報は、各部隊長等を集め全隊員に周知するようにも努めました。

私は、指揮支援隊としての活動をまったく想定しておらず、県隊と指揮支援隊の二つの活動をどのようにすればよいのか整理できませんでした。とりあえず県隊の指揮は別の人に任せようと思いました。

阪神・淡路大震災の時に県隊が分かれ、指揮系統を分けて活動した経験が頭をよぎったのです。経験は大きな財産になるものです。

そして、一刻も早く被災地に到着するため、休憩も最小限とし食事も越中境PAで買ったパンを食べながらの走行です。

しかし、夜間隊列を組んでの移動、給油の制限、磐越自動車道での圧雪、東北自動車道での道路の亀裂、段差等もあり移動は順調にはいかず、また不眠の移動は隊員にとって辛いものであったと思います。

このように負の要素が次々と増えていく中、今後の活動に不安を抱きながらも隊員を絶対に事故なく無事に帰すことだけを強く心に刻んでいました。

【名取市での活動調整】

12日5時30分。出発から約11時間かけて名取市に到着。休む間もなく、野営場所の設営と活動準備です。

県指揮隊は名取市消防本部に入り活動調整を行った結果、沿岸部で壊滅的な被害を受けた閑上地区と北釜地区で活動することになりました。

県隊長として現場へ赴き、指揮にあたるべきところ名取市消防本部の指揮支援本部で活動調整に当たらなければならない、指揮はそれぞれの地区で活動する上級指揮者に委ねました。

阪神・淡路大震災の時と同じ状況です。

また、宮城県庁の消防応援活動調整本部とは、地域衛星通信ネットワークを利用した衛星電話でしか連絡が取れず、連絡が取れてもなかなか返事が返ってこない状態が続きました。



余震が続く中、指揮支援本部での活動調整
(名取市消防本部)

現地の活動は、二つの地区での搜索活動を繰り返し行いましたが、隊員は刻々と迫る72時間の壁と闘いながら、泥まみれになり多くの要救助者を救助し、また被災者の避難介助に当たってくれました。

13日18時12分。ようやく広島市隊が名取市に到着し、指揮支援隊の活動を引き継ぎ、県指揮隊として現場活動ができるようになりました。

【不確実な情報】

今回の活動では続発する余震と大津波警報が継続する中、幾度となく流れてくる「津波がくる。」という情報にその都度活動を中断させられました。

その中でも、14日午前県隊全員で北釜地区の搜索活動中に「自衛隊機が津波を確認し接近している。」との無線情報に、「全員避難、退避。！」と絶叫し、必死に数百メートル走り、付近で唯一残る3階建てビルの屋上に避難した時は、さすがに死の恐怖を感じました。

この情報は誤報でしたが、このように混乱する状況の中では、正しい情報なのかそうでないかの判断ができず、隊員の命にかかわる情報は、すべて正しいと判断せざるを得ないのです。危険側に立っての判断です。

【活動を終えて】

第1次隊の任務は、迅速に出動し、少ない情報の中で状況を判断し被災地での活動を軌道に乗せ

ることだと思います。その観点から今回の活動を振り返ると、早い段階で被災地に入ることもでき、事故なく多くの人を救い第2次隊へ引継ぐことができたことは、概ね第1次隊としての任務を遂行できたものと思います。それもすべて、隊員の皆さんが心身ともに疲労と緊張が続く中で思いをひとつにして高い使命感を持って活動に当たっていただいたおかげだと思っています。

私の活動は、今回の地震・津波の被害の大きさ、また今なお続く行方不明者の捜索活動と照らし合わせたとき、余りにも活動範囲も狭く、期間も短く非常に微力なものです。それでも、初動時の決断、移動中の情報収集、県隊の運用、不確実な情報への対処などについて改めて考えさせられ

ました。

そして、出動したすべての皆さんにとっては、地震・津波による大規模災害現場でしか得ることのできない貴重な活動経験を重ねたということは何よりも大切だったのではないかと思っています。災害は、多くの経験や教訓を与えてくれます。

私がいくつかの局面で、阪神・淡路大震災の経験が状況判断や部隊運用に役立ったように、出動したすべての皆さんが、現地での活動を単に自らの消防史に刻み込むだけでなく、いつの日か今回の「経験」や「教訓」を真に役立たせることができるよう更に日々の訓練を重ねていただくことを心から期待しています。

覆された危機管理意識

消火部隊
派遣期間：第1次隊 3月11日～3月14日 4日間
氷見市消防本部（富山県）
消防司令補
竹内 貞明



津波による未曾有の大災害となった現地、宮城県名取市に緊急消防援助隊富山県隊の第1次隊として足を踏み入れることになった。過去に能登半島沖地震、新潟県中越地震等の大きな揺れを経験していたのだが、発生地点が遠距離にあるにもかかわらず、今回の揺れの長さ、大きさは、その規模を想像するにあまりあるものでした。テレビで刻々と流される緊迫した映像に見入る暇もなく、上司の命により慌ただしく出動準備に取り掛かったのです。東北道を降りるころにはすでに夜は明け、平然とした街並みを走行中は、あれほど悲惨な光景を目にするとは想像すらできませんでした。名取市消防本部において閑上地区での生存者捜索を指示され活動場所に向かったのですが、肝心の道路が瓦礫や海水により確保されておらず、自衛隊や地元建設業者等の賢明な作業を待ちながらの前進となりました。私達が最初に開始した作業は、閑上小学に避難している数百人の避難、誘導と傷病者の搬出、救護でした。暖を取るためでしょうか、3階の音楽室に多くの住民が身を寄せており、私が部屋に入った瞬間「消防の人が助けに来てくれた！」の声、この言葉に改めて責任の重さを痛感したのです。救出手段を考えながら共に担当した消防職員、地元団員や地域住民と協力し、無事全員の避難、救出が完了したときの一時の安堵、達成感は忘れる事ができません。また、同日の夕暮れ時、余震の恐怖と闘いながら崩

れた住宅の2階で救助を待つ女性を救出し、待機する救急車内に収容できた時の喜びはひとしおでした。翌日からの捜索では、多数の遺体を発見しても安置場所が確定していないため、ブルーシート等による目印だけでその場に放置しなければならない心苦しさや悔しさは堪らないものがありました。その中には、使命感を持って住民の避難誘導に当たっていたと思われる団員も含まれており、分団車両の中で息絶えた姿を目の当たりにした時の辛さは言葉に言い表せないものでした。活動最終日の作業中に大津波警報が発令され、至急避難命令が出たときには近くに高台等もなく、これまで味わったことのない恐怖と絶望感に襲われたのです。頻繁に繰り返される余震や津波情報等に惑わされ、退避を繰り返しながら実施した必死の捜索活動は、生涯忘れることのできない出来事であり、同時に地震、津波を含め災害に対する認識の甘さを自ら反省する日々でありました。私達は第1次隊として生存者の発見、救出に主眼を置いた厳しい活動になりましたが、地元消防関係者の強靱な精神力にはたびたび心を打たれました。仲間を失い、家族を失いながらも必死に住民の救助、救出及び避難の手助けを行っている姿を見ただけで胸が熱くなり、本来であれば誰より先に家族、仲間を探したいであろう気持ちを十分察することができたからです。「津波てんでんこ」という方言が東北地方にあると聞きます。津波が

来たら、取るものも取らず、肉親にも構わずに、各自でんでんばらばらに高台へ逃げろ、すなわち「各自の命は各自で守れ」という事です。しかし、この言葉は私達消防人に通用するのでしょうか、また、助けを求めている人をそのまま放置して「暗黙の了解」で逃げる事ができるのでしょうか。私達が体験した貴重な経験を語り継ぎながら、この津波による大災害を教訓に防災訓練等の内容を精査し、住民を含め個々の危機管理意識の高揚を図る事が非常に大切だと感じています。



大津波によって2階部分にまで押し上げられた瓦礫
(関上地内)

拡大する飛行禁止空域との狭間で

大津市消防局（滋賀県）
消防司令
内田 建児



平成23年3月11日（金）18時30分、滋賀県防災航空隊は福島県への応援出動指示を受けた。地震の揺れを検知して、福島第一原子力発電所はすべて停止、1～3号機の緊急炉心冷却装置稼働用の非常電源が故障し、「原子力緊急事態宣言」が発令された。翌日9時09分、福島県消防防災航空センター（以下「ヘリベース」という。）に着陸、福島第一原子力発電所から半径10km、高さ10kmの空域について、飛行自粛の航空安全情報が出されていた。

緊急消防援助隊として最初の任務は、南相馬市における捜索・上空偵察であった。山岳部を抜け沿岸部上空に近づくと、不透明であった被災地の状況を徐々に目の当たりにする。沿岸のたまりは累々と浮かぶがれきで埋め尽くされ、潮の引いている地上は農地か住宅地かの判別さえつかない。そんな光景が沿岸部に延々と続く。愕然としながらも、飛行自粛空域の境界まで南下し捜索を実施した。この時点では、まだ「原子力施設の安全神話」を心のどこかで期待しながら活動していたのかもしれない。帰投後、福島第一原子力発電所1号機の爆発をテレビで確認した。原子炉の被害状況が不透明なまま、2回目の任務付与があった。日没間近、他のヘリコプター間の航空無線を傍受、「原子力発電所が爆発」との内容であったが、帰投し確認してみると先の爆発以外の情報はなかった。初動時期に様々な機関が広範囲に活動



活動の場所：福島県

するなかで、情報を一元的に管理しリアルタイムに発信していくことの難しさを改めて感じさせられると同時に、今後の活動において大きな不安を感じる出来事となった。福島第一原子力発電所から半径20km、高度無制限に飛行自粛空域が拡大されたのは、ヘリベースに帰着後1時間経過してからのことであった。

3月13日、他の消防防災ヘリから応援要請を受け上空に入ると、救助を求めて手を振ってくる孤立住宅を多数確認した。2回の出動で5名の救出人員となったが、地上へ降りた隊員の活動服から通常を上回る放射線量が測定され始めた。

3月14日、捜索・地上隊支援の任務で離陸、沿岸部に差し掛かったところ「津波を目視で確認した。地上活動隊は高台へ避難せよ。」との至急報を傍受した。広大な被災現場、未救出の要救助者はどうなるか、地上の全ての者に津波来襲の情報は行き届くのか、避難は可能か、様々な思いが頭のなかを駆けめぐった。第1波、2波と大規模に接近中との情報が続くなかで、できる限り広範囲に避難広報を実施した。そのようななか、地上の県隊長から活動隊20名のピックアップ要請が飛び込んできた。急行するも、先着していた福岡市消防航空隊から20名のピックアップは無理であるため高台に避難誘導するとの連絡を受け、当隊は避難広報を続けた。その時、耳を疑うような情報が飛び込んできた。「きのこ雲を確認」「福島第一原子力発電所3号機が爆発」という内容であった。一瞬機内が凍り付き時間が止まったような感覚に陥った。一時退避するのか、津波対応を継続するのか、運航指揮者として難しい判断を迫られた。爆発の規模は分からないが、1号機並の爆発なら安全距離であった。津波到着まで、既にかかなりの時間が経過しており誤報の可能性があった。徐々に平常心を取り戻し、避難広報を継続する。まもなく活動中の全ての航空機に対し、帰投指示が出された。この日、原子力環境監視センター員2名がヘリベースに派遣され、除染の必要な隊員や機体を拭いたウエス等に高い数値が示された。さらには、3号機炉心溶融の可能性がテレビなどで大きく報じられた。

3月15日早朝、福島第一原子力発電所4号機と2号機で爆発音が確認された。ヘリベースでは屋

外の空間線量が上昇しているため、屋内へ退避するよう指示があり、福島第一原子力発電所から半径90km飛行禁止との連絡（後に半径30kmに訂正）が入る。加速度的に福島第一原子力発電所の状況が悪化している状況が感じとれる。このまま原発の状況が悪化すれば、隊員を被ばくさせ、ヘリコプターも高い放射線測定数値により飛行できなくなるのではと考えるに十分な環境に陥っていた。ヘリベースから一時退避してもよいとの指示が出たのはまもなくのことである。当隊は、機体の点検もあり自県に帰隊した。

3月18日機体点検を終えた当隊は、再度ヘリベースに入った。時期を同じくして、総務省からの放射線管理資機材がヘリベースに整い始めた。防護、スクリーニング、除染という個人や機体の被ばく管理体制も整えられた。次第に任務も広域救急搬送へと変わった。長時間の防護服での任務はきつく苦しいものとなったが、原子力災害に対する緊張感は、被ばく管理することによりかなり低減され、継続して活動することが可能となった。

予想を遥かに上回る大規模災害と、不安定で明確な情報がかめない原子力災害によって拡大する飛行禁止空域の狭間で、隊や航空機を被ばくから守りつつ任務を遂行していく難しさを痛烈に感じ、飛行禁止空域内で助けを求めている人々に届かぬことを悔いながら、3月28日任務解除を受けた。緊急消防援助隊として出動してくれた隊員やクルー、またその家族に感謝し、原子力災害の終息、お亡くなりになった方々のご冥福と被災地の復興を心から願うものである。



ヘリコプター内、救命活動

貴重な体験

（消火部隊 第1次派遣）
泉佐野市消防本部（大阪府）
消防士

山内 雅之



3月11日に東北地方太平洋沖地震が発生し、第1次派遣隊員として被災地へ出動した。

東北自動車道を北上して行くにつれ、「早く被災地へ入り活動したい」という気持ちとは裏腹に、道路は地震の影響を受け陥没し、思うように進行することはできなかった。

しかし、給油等で立ち寄ったサービスエリアの従業員の皆さまからは、私達にできる限りの協力をさせてもらいたいとの理由で、停電し断水している中、ローソクで明かりをとりながらも、温かいスープやうどん等を提供していただき、また「頑張ってきてください」等の多くの声援を頂戴しながら、約30時間かけて野営地となる岩手県遠野市に到着した。

13日早朝、野営地から任務地である釜石市に近づくにつれ、家屋が倒壊している中、住民の方々が沿道に出て、私たちの車列に向かって深々と頭を下げてくれたり、手を振って「よろしくお願いします」等のたくさんの声をいただき、その姿を見て熱いものが込み上げ、涙をこらえながら1人でも多くの命を救えるよう、全力を尽くそうという新たな決意と、使命の重さをひしひしと感じた。

釜石市に到着後、指揮隊からの命により、市の災害対策本部に合流し、救助活動上必要となる住宅地図の提供を受けた後、活動を開始した。

地震発生後、48時間以内に被災地に入り、私は「多くの生存者を救出することができる」と確信していましたが、瓦礫を手作業で除去しながらの活動の結果、救出した人の全てがご遺体であった。

そして地元の寺は震災直後から遺体安置所となっており、これ以上多くの安置はできないとのことであったため、任務外ではあるが災害対策本部員1人と廃校になった校舎に安置所を設営し、ご遺体の発見場所等の情報管理を行っていた。訪れた遺族の方から、「亡くなっても会えただけでうれしいです。感謝します」とお礼を言っていたが、合掌している姿を見ると、気の利いた言葉一つも出てこなかった。

14日は、大槌町で活動を行い、街が消失している光景を見たとき、背筋が凍りつくような思いをし、また活動中、記念写真やランドセル等を目にするたびに「この人達は無事でいて欲しい。遺体として発見はしたくない」と自然に考える自分がいた。

私はこの2日間で活動を終えたが、生存者を救出することはできず、地震・津波の怖さを実感するとともに自身の無力さを感じた。

しかし、今回の活動の中で、苦難に対して一人ひとりが力を合せ助け合い、励まし合いながら乗り越えていかなければならないという、共助の大切さ、そして人間の素晴らしさをはじめ、被災された東北の皆さまから多くのことを教わった。この貴重な体験は、防災の一翼を担う自分自身のために決して風化させることなく、そして地域住民の安全のために語り続けていこうと思う。

最後になりますが、犠牲となられた皆様にお悔やみ申し上げ、また被災地の一刻も早い復旧、復興をお祈りします。

緊急消防援助隊の手記 (14) (岩手県 兵庫県消防防災航空隊)

私が見た東日本大震災

兵庫県消防防災航空隊 (兵庫県)
消防司令補
廣井 紀吉



いつもと変わらない昼下がりが過ぎようとしていた。午前中県内の災害に出動し、報告書作成のためパソコンと向き合っていた時、なんだか舟に乗って揺れているような感じがした。俺も年を取ったなど一度目を擦り、再度パソコンの画面を覗き込むが、変わらず舟で揺れているような感じがする。そうこうしていると、事務所から「地震だ」と誰かの叫ぶ声があった。慌てて事務所に駆け寄ると、テレビの即報に耳を傾けている職員が、目の前でユラユラ揺れているではないか。遠く離れた神戸の地まで揺らし、津波による多くの犠牲者を出した東日本大地震であった。

テレビ画面から、次々と被害状況が入ってくる。我々も県内の被害状況調査警戒のため、淡路方面へのフライトを行い、事務所に残った隊員が、緊急消防援助隊出動要請に備え準備に取りかかった。しかし、機体の整備に時間が必要という事で、すぐにでも駆けつけたい気持ちとは裏腹に、発災から3日後の3月14日11時に神戸ヘリポートを離陸、同日18時15分岩手県花巻空港に到着した。既に多くの応援機が飛来しており、花巻空港内が混沌としている様子を今でも覚えている。

我々消防防災航空隊の任務は、沿岸部での捜索救助や孤立集落への物資搬送、特に沿岸部から内

陸部への救急搬送が主な活動であった。

情報収集のため、孤立集落にホイスト^(注)降下し、住民の代表者と接触しようと道路を走っていると、側道に一列に並んだ住民の方が「ありがとう」「ありがとう」と言ってくれる。初老の方は、家族に支えられ手を合わせて拜んでいる。また、小学校に着陸し物資を供給しているときには、子供達が無邪気に物資搬送を笑顔で手伝ってくれ「カッコイイ、ウルトラマンみたい～握手して」と言っている。

救急搬送では、患者につき添ってヘリに同乗した看護師が、自分の実家も流されて、家族の安否も分からない中、懸命に看護師の仕事を全うしていた。また、ある救急患者の家族は、夫を津波で亡くされたうえ、最愛の一人娘も負傷し、どうしていいか分からないと悩み苦しんでいた。

そんな中、私はただただうなずき話を聞く事しかできない。そして、頑張ってくださいとしか言えなかった。被災された方は、頑張っている。そこに「頑張ってください」という言葉が適切であったのか。でも「頑張ってください」しか言えなかった。

我々消防防災航空隊は、発災当初、陸上部隊が津波等で進入出来ない場所でホイストを活用し多くの方を救出した。しかし、ホイスト救助以外に

(注) ホイストとは、人又は、荷物の吊り上げ、吊り下ろしに使用する救助用ウインチ装置である。

も、ヘリの機動力を有効に活用できたのではなかっただろうか。果たして、陸上部隊との連携は、とれていただろうか。反省すべき点も多い。

例えば、上空からの捜索に陸上部隊を搭乗させたり、遠隔地への部隊搬送手段として、ヘリを利用するなど多岐にわたっての活動が可能であった。ヘリを有効に活用するには、やはり陸上部隊

との連携は欠かせないはずである。

救助とは目に見えて行う活動だけが救助ではない。要救助者の心も救助するという事が、本当の救助ではないだろうか。震災当時は、無我夢中で活動していたが、今振り返ってみるとどうであったのか、自問自答の毎日である。どうか一日も早く皆様に笑顔が戻る事を切に願っている。



緊急消防援助隊の手記 (15) (新潟県 兵庫県隊)

最前線へ一刻も早く
物資を届けないと……

神戸市消防局東灘消防署 (兵庫県)

岡 孝夫



東北地方太平洋沖で地震が発生、東日本大震災のはじまりである。そのとき私は、青森県八甲田山中にいた。スキーで山の麓付近までくだってきたときに遭遇した。大きな木々が長い間揺れ続けたことを覚えている。その後、数十分で携帯電話は不通に、ホテルも停電で機能を失い、状況がよくつかめないまま一夜を明かした。翌日、被災を免れた青森空港から無事帰神することができた。そのころすでに兵庫県隊は被災地に向け出発していた。

派遣命令は3月14日に所属からの電話で、派遣場所は新潟市であること、任務は兵庫県隊への前線基地の設営及び運営であること、私を含む5人編成であること、派遣期間は3月15日からとりあえず約1ヵ月であると告げられた。この瞬間、「自分も役に立てる」と「自分に何ができる」の相反する感情がこみあげ、やや高揚する自分がいたが、出発までの限られた時間を考えると冷静にならざるをえなかった。現地において必要で役立つものは何か？ 頭の中でぐるぐる回った。

15日早朝、伊丹空港から新潟空港を経由して前線基地を設置する新潟市消防局入りすることになった。移動中、渡された資料に目を通すにつれ、「神戸消防」という看板を背負って被災地に入ることの重みを実感し、なぜ自分が選ばれたのか？ という思いが頭をよぎり、打ち消すのに苦労した。他のメンバーも同じ思いであったように

感じる。

新潟空港へは11時に到着。すぐさま移動手段と補給物資搬送に不可欠なレンタカー調達に走ったが、震災の影響と3月半ばという時期だからか、車がない。まったく想定していなかった、というか我々の考えが甘かったと……まさか新潟で……この瞬間、被災地に入ったと強烈に実感した。「一刻も早く最前線の隊員に食料等の物資を届けないと……」、焦っても仕方がないし、どうしようもない。協議の結果、先行して新潟市消防局入りする班と、レンタカーを探す班の二手に分かれることにした。

前線基地は新潟市消防局の会議室に間借りするかたちとなり、そこではすでに新潟市後方支援本部が設置され慌ただしく情報が飛び交っていた。手短かに挨拶を済ませ、兵庫県隊の新潟補給基地をとりあえず設置することができた。

新潟補給基地はどんなことをしていたのか？ と、よく聞かれる。基地の活動は、目立たず表に出るものではない。たとえるなら木の根の部分と同じで、そこがしっかりしていないと、枝や葉という大切な活動隊員をいかすことはできない。

表現するなら、“何でもした。あらゆる物資の調達から活動隊のごみ処理まで”、“隊長をはじめ各隊員が最善と考える発想を個人で判断して行動した”、“やってよいかどうか確認する暇もない場面がたくさんあった”、“状況がめまぐるしく変わ

るなか、事前計画を立てても一瞬で変更にくぐり変更、真の柔軟な対応と行動が求められた”、“失敗して気付かされることの繰り返しだった”、そんな23日間の活動であった。

基地を設置した翌日の16日夜、初めて石巻野営地と福島県庁へ物資を無事届けることができた。そこにたどり着くまでは焦りと不安の連続だった。同じ目的を共有する消防人として、特に新潟市消防局の協力なくしては実現できなかった。早朝から夜明けまで走ったことのない道を、慣れないトラックに荷物を満載し、東北地方特有の積雪や強風に行く手を阻まれながら、往復400～700キロメートルの道のりを何度走ったことだろう……。

ときには隊員間で激しい意見のぶつかり合いもあったが、まったく個性の違うメンバーのさまざまな発想で窮地を乗り越えることができた。そして何より追加派遣の4人に助けられた。当初派遣の5人では、とうてい1週間ももたなかったと思う。

市内を物資調達のため行動する私たちを見かけると、感謝と温かいねぎらいの声をかけてくださった新潟市民の方々、馴染みとなった定食屋の店主……キリがないほどたくさんの方に助けられた。

新潟入りして半月以上経過した4月2日、はじめて被災地に入って津波被害の現場を目の当たりにした。想像をはるかに超える津波が猛威をふるった爪跡は、あまりにも大きく広範囲におよび、海沿いに暮らす人々と町並みのすべてを破壊し尽くした光景に直面し、言葉を失った。この現実を受け止め、心に刻むことが苦しくなった。

車窓を透して何気なく見かけた通行止めの立て看板に「ヤジ馬は帰れ！」と書かれてあった。その瞬間、心も体も凍りつく感情がこみ上げ焦りを覚えた。被災者ではない自分は、今ここで何をしているのか？ 調査という目的で被災地に入るとは、偽善ではないか……。懸命に生きる被災者たちに白い目で見られているのではないか……。そんな想いで自分が惨めになった。決してヤジ馬であってはならない。当然のことだが誰かに頭を殴られた気がした。

『失意の胸へは だれも踏み入ってはならない
自身が悩み苦しんだという よほどの特権を持たずしては』

これは、派遣中に現地で読んだ新聞の引用である。「ヤジ馬は帰れ！」と荒々しく殴り書きされた文字を思い返しては、被災者の方々の心の中は、私にはとうてい測り知れないと痛感した。

思えば厳冬の被災地に飛び込み、約1ヵ月近くに及ぶ災害派遣任務を終了し、4月6日に帰神したころ、神戸は春の陽ざしに満ちあふれ、当たり前前の日常がそこにあった。所属復帰して日が経過したが、被災地における23日間という非日常を心と体がうまく理解してくれない。これは、今回派遣の多くの隊員に共通するのではないだろうか。

それ以上に家族や友人、雨をしのげる屋根、すべてを失った方々には、一体いつになれば当たり前前の日常が戻ってくるのだろうか……。神戸もそうであったように、いつの日か復興を成し遂げた町、お世話になった新潟市を訪れ、そのときの自分の心を素直に感じてみたい。

緊急消防援助隊の手記 (16) (宮城県 広島県隊)

東日本大震災における
施設課の対応等について

(後方支援部隊 第12次派遣隊)
広島市消防局 (広島県)
消防司令

中島 輝文



1 はじめに

平成23年3月11日(金)14時50分頃、S嘱託員に東京出張中の息子さんから「地震が発生し、5分ぐらいひどく揺れている。」という電話が入り、事務所で執務中であった私は、その時初めて関東地方で大地震が発生したことを知りました。

暫くしてテレビで、大地震発生時の様子と東北地方で起こった想像を超えた大津波の映像を目の当たりにして「これはすごいことになっているな。」と感じ、その後次々と入ってくる情報から緊急消防援助隊(以降「緊援隊」と記す。)の要請があるかもしれないと思いました。

2 施設課での対応

緊援隊の特命出動を考慮し、広島市出動計画に基づく施設課の任務分担を再確認し、派遣を念頭に第1次派遣に係る施設課職員の選定等の準備を始めましたが、当日の派遣は無いことから自宅待機することとなりました。翌日の3月12日(土)午前3時、消防庁長官からの出動準備要請により緊援隊の派遣が決定したとの招集電話があり、準備のため出局し派遣車両の軽微な故障に対応するための電球、ヒューズ、ブースターケーブル、修



給油状況【東北道 国見SA】(3月13日 15時31分撮影)

理工具等を準備し、派遣車両に携行させることとしました。

当日、施設課では派遣隊の支援として高速道路での給油状況等の確認などの情報収集を行いました。出動場所が決定されていない状況下での派遣であり、山陽、名神、東名、北陸自動車道全てのサービスエリアを確認する必要があり、また、掛売りができないなど、実際に燃料の補給にあたっては、現金で給油するしか方法がなく、最終的には派遣隊に任せるしかありませんでした。

その後、国から貸与されている燃料補給車の出動要請がありましたが、継続検査整備(車検)を3月15日から予定していたため、車検依頼先の会社に実情を話し、急遽、3月13日(日)までに終

了してもらうよう要請し、整備工場が休日営業を行っていたことから、何とか第2次派遣の出発に間に合わせることができました。

派遣中は、現地からの消耗品等の要請に対し、派遣者交替時に持参させるなど対応しましたが、パンク等の修理については、現地のガソリンスタンドへ連絡をとり、現地で対応することが可能となりました。

また、過去にも緊援隊訓練に派遣した車両のタイヤバースト、サイレンアンプの故障等がありましたが、今回の派遣に関してはタイヤパンク等の小修理はあったものの、災害活動に支障をきたすような故障が発生しなかったことは幸いでした。

派遣職員の活動後の帰還方法は、職員の疲労を考慮し、途中の静岡駅までバス搬送し、新幹線で広島に帰る方法をとることに決定されました。なお、緊援隊出動計画の任務分担になかったため、広島市国際消防救助隊出動計画を適用し、施設課施設係で乗車券の手配を行うなど第11次派遣者分まで対応することとなりました。

私は、第12次派遣隊として、緊援隊の運用車両、資機材等の撤収、回送のため、県の用意した大型バスにより、4月12日から宮城県名取市宮城県農業園芸総合研究所へ出向しました。

到着して、名取市で最も被害の大きかった閑上地区を視察しましたが、すでに検索が終了し、大型重機、ダンプ等による災害復旧作業が行われていました。また、住宅の基礎部分のみが残った状況や建物の残骸、船、車などの漂流物の多さを目の当たりにして、津波の破壊力の凄まじさを痛感し、この津波により亡くなられた多くの方々のご冥福をお祈りするしかありませんでした。

その後、新潟を經由して北陸自動車道を南下、途中、富山県消防学校で一泊し、人員・機械器具



燃料補給車による給油状況(4月14日8時08分撮影)

とも無事に安佐南消防署に到着することができ、全ての任務が完了しました。

3 施設課の今後の課題と対策

(1) 長期の派遣となることを想定し、派遣車両の整備状況等を十分考慮し派遣する必要があります。

なお、今回の例でも分かるように長期間にわたる災害派遣では、現地で車検切れとなる事態が予測されます。代替可能車両は回送入替で対応できますが、代替できない特殊車両(国からの貸与車両を含む)については、国等に対し検討を要望する必要があります。

また、派遣車両は事前に登録されていますが、派遣車両の決定にあたっては施設課と協議し、整備状況等を勘案し決定する必要があると考えます。

(2) 国の補正予算による消防車両等のハード面の整備も重要ですが、今後、実際に消防車両等を有効活用するための燃料補給体制等、ソフト面の整備も図る必要があると考えます。公務従事車両証明書による有料道路の通行料徴収免除までとはいかなくとも、例えば、燃料給油を書面により行い後払いの方法とするなど国等に対し

検討を要望する必要があります。

- (3) 行程によっては、このたびのように長距離を走行することとなるため、交代要員を含めた機関員の適切な運転管理を行う必要があります、そのためにも休憩用車両の同行等が必要であると考えます。
 - (4) 複数台のポンプ車等を派遣する場合でも、同型車種を派遣することにより、部品等の共通が図られ、タイヤパンクを例にあげると2台派遣すれば2本の予備タイヤを使用することができます。
- また、発電機、投光器等の資機材については、故障発生リスクの少ない新しい資機材を持参する必要があります。
- (5) 予め派遣に係る修理対応用の携行品リストを作成し、これに基づいて準備しておく体制作りが必要です。
 - (6) タイヤは、経年劣化によるバースト等の危険性があり、ゴムの性質上、タイヤの溝が十分あっても、それだけで良否の判断はできません。タイヤの製造からの経過年数も考慮して更新を図っておく必要があります。
 - (7) 日常の点検・整備を十分に行い、修理等が必要であれば、その都度迅速に対応し、常に災害対応できる体制を整えておかなければならないと考えます。



車両点検状況(4月14日19時04分撮影)

4 おわりに

今回派遣した車両については、第1出動区域への災害派遣を想定する中、片道だけで1,200kmを超える長距離走行を強いられましたが、派遣途上及び派遣活動中に大きな故障が発生しなかったことは幸いであり、日頃の点検・整備がいかに重要であるかをあらためて実感しました。

派遣中、現地からの要望で準備したものが多かったように思いますが、今後も広範な地域への長期間の派遣を考慮し、今回の派遣活動と局各課の任務に係る問題点、反省事項等の課題を抽出し、検討を行い、次回派遣の糧とするとともに、現在、東海地震、東南海地震、南海地震の発生、更には関東直下型の地震の発生が予想される中、これからも遠距離地への緊援隊派遣を想定し、日頃から車両を始め消防機械器具の点検、整備の徹底と修理等の迅速な対応を図っておく必要があると考えます。

被災地の空

広島市消防局 (広島県)
消防航空隊 パイロット
消防司令

小笠原 光峰



平成23年3月11日午後2時46分過ぎ、東北地方を震源とする大規模地震の発生とそれに伴う大津波警報発令を知らせるテロップがテレビに流れ始め、隊内に緊張が走りました。

時を待たずして震災の状況も流れ始め、目を疑うような光景に釘付けになりました。盛り上がる海面、まるで木の葉のように成す術もなく流される船や自動車、家屋、そして巨大なオイルタンクまで…。映画の1シーンかと思わせるような凄惨な様子に我が目を疑うばかりでした。その日の夕方、消防庁から当隊にも翌12日早朝に出動するよう応援要請がなされ、日出とともに基地を後にしました。

岩手県及び福島県に計3回延べ28日間の応援出動を行い、救助、救急、情報収集及び物資搬送等の応援活動を実施しました。

今回の応援出動は、ヘリコプターの運航面において非常に厳しいものがありました。3月とはいえ、東北地方の天候はまだまだ厳しい冬の状況であり、先が見えないほどの雪雲に針路を絶たれたり、これまで経験したことのない強風に恐怖を覚えるほどの動揺に見舞われたりしました。また、気象的に厳しかったばかりでなく、震災の影響で



岩手県大槌町(大槌港)にて(3月13日17時17分撮影)

市街地に発生した火災の飛び火で広範囲にわたって林野火災が発生し、その煙で視界不良となる中、他の航空機との空中衝突の危険を感じながらの飛行を余儀なくされるという大規模災害特有の厳しい面もありました。

今回、混乱する震災発生の初期から現場活動に当たり、その中でいくつかの疑問点を感じました。

最も感じた点は、想定以上の航空隊の応援を得た場合の活用方法です。

今回の大震災では、東北3県すべての県が受援計画を超える応援を全国から受けられたと思います。各県とも災害対策本部の置かれている県庁と

被災地間の電話回線が不通だったり、不通にはなっていないまでもパンク状態であり、見えない聞こえない被災地の状況を知るには、こちらから見に行くべきだと思いました。

大規模災害が発生した当初は、全てが混乱し、正確な情報は望めません。災害対策本部からの出動要請に即応するための隊を確保しつつ、可能な限り多くの隊を躊躇なく、また遅滞なく、現場に出動させ、被災地の声を災害対策本部に届けることが何より重要であったと思います。実際、当隊の活動中にも、情報収集のため着陸して初めて救助を求めている人がいることが分かったという事例もありました。状況が分かってからヘリを飛ばすのではなく、分からないからこそ飛ばす姿勢も必要であると思いました。

次に感じた点は、現場活動中、他省庁の機体との無線交信ができなかったことです。同じ空域を飛行しているながら、多くの場合、予め調整していたはずの無線周波数でいくら交信しようとしても、何ら応答が得られませんでした。互いに意思疎通ができないまま狭い空域にヘリが2機、3機と集まって活動することは非常に危険です。災害対策本部における共通周波数の調整と、各関係機



岩手県釜石市にて(3月13日14時40分撮影)

関内部での周知徹底は、極めて重要であると感じました。

最後に当隊の活動とは直接関係ありませんが、早期に消防防災ヘリとドクターヘリの連携を図ることによって、全国から集結したDMAT隊員の消防防災ヘリによる現場投入や、投入された医師の要請による医薬品搬送や患者搬送などを迅速に行うことが可能となり、より有効な救急救助活動に繋がるのではないかと感じました。

この先、広島が同様の大災害に見舞われるかどうか、知る由もありませんが、今回の応援出動を通して学んだ多くのことを教訓に、常に問題意識をもって勤務に精励したいと思います。

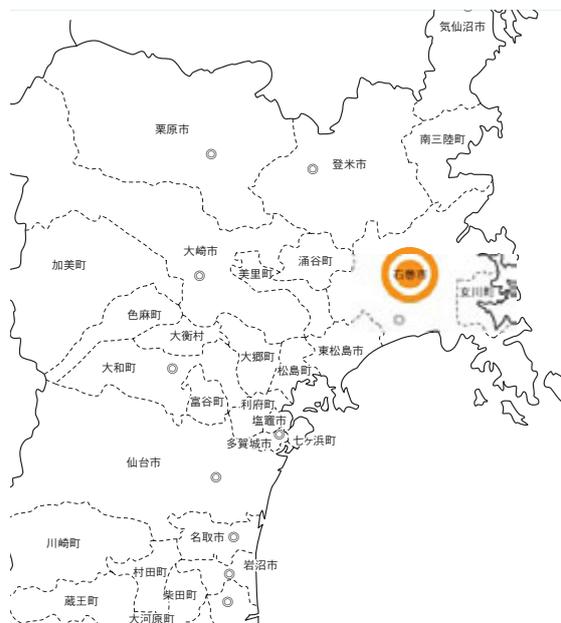
長い道のり

下関市消防局 (山口県)
消防司令長
山内 和夫



震災発生から3日目の平成23年3月14日(月) 11時25分に第3次派遣隊としての出動指示があった。下関市消防局は、6隊22名が出動することになり下関市消防訓練センターにおいて慌ただしく資機材及び物資を積み込み、山口県隊の集結場所である宮島SAに向け出発しました。総務省消防庁からは東京方面に向かって進行するように指示があり、今宵は兵庫県広域防災センターの屋内テニス場での宿泊です。高速道路を走行する消防車両は、燃費が悪く約2~3時間走行するたびに給油しなければならず、また、全車両給油に約1時間かかりました。静岡県掛川市を通過中、総務省消防庁から、東北道を経由し一旦栃木県消防学校に宿泊したあと、宮城県に進出するよう指示がありました。翌日、東北道を北上していると、福島第一原子力発電所の事故により放射能が漏洩しているとの情報で緊張が高まり、那須高原SAにてガムテープで車両の目張りを行い、隊員全員はマスクを着装し、放射能測定器による測定をしながらの走行となりました。

北上を続けていると突然雪が降り始めましたが、この時期の下関では考えられないことでした。雪が吹き曝す高速道路上には、あちらこちらに亀裂が生じており、地震の凄さを感じました。石巻市市街地に入ると周りには船が押し流されており、津波の恐ろしさを目の当たりに見ながら、



活動の場所:宮城県石巻市

下関を出発して3日目約1,400kmを走り、やっと災害活動現場の進出拠点となる、石巻市総合運動公園に到着しました。既に新潟県、和歌山県、北海道、兵庫県隊と自衛隊がベースキャンプをしており、自衛隊のヘリコプターがひっきりなしに飛びかっていました。

駐車場には、先着の消防隊、自衛隊の車両がところ狭しと駐車していましたので、災害現場に出動する車両を優先的に駐車させ、後方支援隊の車両は、少し離れた民間会社に駐車をさせていただきました。野営場所には、自衛隊が大きなテント

を張り巡らしており、一瞬どうしようかと思っ
て見渡すと、ちょうどエアートントを張れるス
ペースがありましたので自衛隊に相談し、活動に支障
ないよう展張することで了承してもらいました。
エアートント10張りを1列に張り終え、食事の準
備に取り掛かりました。調理場所は、グラウンド
横にサッカーのゴールポストがスタンド側に横た
わっていたので、このゴールポストにブルーシー
トを張り、ここを拠点に業務用コンロで湯を沸か
し、隊員は初めて口にするアルファ米を食べま
した。食後、隊員は明日からの活動に備え、エ
アートントに入り寝袋で就寝しました。翌日は薄
らと雪が降り積もっており、ペットボトルの水は
凍っていました。前もって防寒衣を準備していま
したが、下関の寒さとは比べ物にならない寒さで
した。この寒さのなか、隊員を送り出したあと、
燃料補給のためガソリンスタンドに携行缶を持参
し、燃料の確保にあたりました。隊員の昼食であ
る、水とカンパンと栄養補助食品を各人に携行さ
せ、残った私達も活動隊員と同じカンパンと水で
昼食をとりました。活動先から戻ってきた隊員
は、テンションは高いのですが、寒さで睡眠不足
のせいか幾分疲労が溜まってきているようでし
た。テント内は依然として寒く、寝袋を2枚重ね
にし、その上に毛布を掛けての就寝となりました。
後方支援隊として出動し、一番懸念していた
ことはトイレのことです。活動拠点となっている
石巻市総合運動公園は、停電していたもののトイ
レは使用可能であることを知り、ほっとしまし
た。トイレは消防、自衛隊の隊員等が使用しまし
たが、水洗であったため、自衛隊が水バケツの準
備等の配慮をしてくれましたので助かりました。
このとき私は「トイレを制するもの活動を制す
る。」といっても過言ではないなと思いました。
私達は、食事の準備をするとともに、湯をクー
ラーボックスに入れそのなかにタオルをつけてお
き、戻ってきた隊員にタオルを渡し、顔を拭いて
もらいました。心地良さそうにしている隊員の顔



宮城県石巻市へ(高速道路運行状況)

を見てるとほっとしました。到着から4日目、
山口県隊は午前中活動をした後、撤退する旨の指
示があり慌ただしく撤収作業に取り掛かりまし
た。真っ先に燃料を確保をした後、エアートント
の収納、資機材の積み込み等、撤収が完了したの
は午後を少し回ったところで、山口県隊は石巻市総
合運動公園を後にしました。途中、石巻地区広域
行政事務組合消防本部に立ち寄り、活動終了を伝
えた後、石巻市を離れました。帰路は、今宵栃木
県消防学校で宿泊した後、翌日東京有明港から
フェリーで北九州市新門司港に向け出航をしまし
た。船中2泊で船酔いをした隊員もいましたが、
早朝無事到着しました。ここで緊急消防援助隊山
口県隊の解隊式が行われ一路下関市を目指し、下
関市消防訓練センターに到着、6隊22名が事故も
なく無事帰ってこられたことに感謝しました。3
月14日に出発してから22日までの9日間は、私
の消防人生において、忘れることができない災害
活動となりました。

この東日本大震災において、本州の最西端、下
関から東北地方に位置する石巻市までの約
1,400Kmを消防車両で出動して思ったことは、消
防車両での移動は、道路交通状況や燃料給油等で
思った以上に時間を要することでした。このた
め、一刻も早く災害現場に着くための方策を、今
後考えていかなければいけないと感じました。

終わりにあたり、今一度亡くなられた方々のご
冥福を祈るとともに、一刻も早い復興を祈願いた
します。

東日本大震災に出動して

福岡市消防局（福岡県）
指揮支援隊長
（出動時：警防部警防課長）

山下 周成



はじめに

今回の東日本大震災は、日本の歴史上、最も大きな災害と考えられ、しかも原子力発電所の問題もあり、現時点（平成23年11月）になっても、まだまだ収束が見えない状況である。

このような災害であることから、国、県、市、消防また報道機関などすべてが混乱した中での活動であり、自分自身のことも含め、多くの反省点などがあるが、あえて以下に記すことにより、今後の参考になればと考える。

地震発生から出動まで

消防本部の4階で会議中に、地震の発生を知り、時間を追うごとにその被害の大きさが報道で伝えられていたが、実際に福岡県隊に出動指示があるまでの間は、「東北地方には、福岡の緊急消防援助隊は出動するような計画にはなっていないから…」という気持ちと、「これほどの災害なので、一刻も早く出動すべきではないか…」という気持ちが、交錯し続けていた。

3月11日は、災害対策本部を立ち上げ、そのまま一睡もせず、情報収集に努めている中、国からの情報等が二転三転した後、深夜に福岡市消防航空隊の出動が決定し、市長、局長をはじめとする関係職員との連絡調整、またマスコミ等への情報提供など、慌ただしい動きを続け、震災翌日（12日）の夜明けとともに本市へりは被災地に向けて離陸した。

平行して、陸上部隊も徐々に出動県隊の範囲が関西から中国地方にまで広がっていったが、13日にその動きは止まり、九州地方や四国地方までの出動範囲拡大の可能性が少なくなったとの見方や情報が入って来ていた。

そのような中、14日の昼になって、急遽、九州全県の出動決定が伝えられたが、本音を言うと、すでに発災から一定の日にちが経過しており、生存者がほぼ見込めない中、今更、我々が出動しても、意味がないのではないかという気持ちも小さくはなかった。

出動から被災地到着まで

○福岡市消防本部出発から九州縦貫道めかりパーキングエリア出発まで

集結などについては、前年度に緊急消防援助隊全国合同訓練に参加していたことから、比較的スムーズな動きと訓練の反省点を踏まえた活動が出来たと思う。

福岡市緊急消防援助隊の集結場所とされている早良消防署において28名の隊員は、関警防部長から激励の言葉を受けた後、めかりパーキングエリアに向け出発した。9台の車列を組んで都市高速を進んでいると、車体に貼られた「緊急消防援助隊」のプレートを見た並走車両の市民から拍手されることなどがあり、市民の関心の高さや期待の大きさを実感した。

また、福岡県隊の集結場所であるめかりパー

キングエリアにおいては、多くの報道陣に囲まれながら、集結各消防本部の点呼・人員把握や中隊分割などについて代表消防機関である本市消防局を中心に的確に実施され、今後の体制が整えられた。

○めかりパーキングエリアから被災地まで

責任者の一人として、携行している個人用と各方面に登録している公用携帯電話の計3台に頻りに様々な電話があり、電話応対やその後の方針決定、各隊との連絡・調整などを走行中の車両内で実施することなどから、想像以上に力が必要であった。

県隊全部で54台という車両であることから、とにかく事故がないことだけを祈りながらの北上であった。

その車両台数の多さ、また巡航速度の違い、さらには燃料の補給時期などから、思うように進めないほか、宿営地が決定していない中、前進するのは目標を立てにくく非常に苦慮する場面が多々あった。

さらに、全隊への連絡に手間と時間を要し、多くの隊が出動すればするほどパソコンなどによる一斉メールの活用の必要性を感じた。

また、原発の動向などが非常に気になり、車載ラジオにより情報収集を行うが、走行中の後部座席では、聞こえない場合も多く、また前述のとおり、電話応対も多いため、リアルタイムに正確な情報は掴みにくかった。

特に関東に入る直前に、「実は○号機がメルトダウンしたらしい。」「米国は、米国人に対して原発から半径○○km以内からの退去指示をした。」「自衛隊が、原発から半径○○km以内を飛行禁止とした。」「東京にも濃度の高い放射性物質が飛散しているらしい。」「他国からの救助隊は撤退を始めているらしい。」などの情報が飛び交っていた。しかしながら、総務省消防庁などからの正確な情報伝達はなかったため不安を増長させた。

特に、放射線の問題については、その数値により、隊員の将来的な健康上の問題も想定さ

れ、県隊全員を預かる一人として、今後の進行を如何にするべきか困惑した。

あるサービスエリアにおいて、多数の県隊が休憩していたが、同様に様々な情報を入手し、今後の進入経路等の方針について検討を行っている状況であった。

そんな中、本市消防局に設置している後方支援本部から、「諸般の事情を考慮し、本日は静岡県消防学校に宿営せよ。」という連絡があった時は、非常に適切な決定をいただいたと思った。

静岡県消防学校で深夜、明日の打ち合わせ会議を実施している最中に、いくつかの携帯電話の緊急地震速報が鳴り始めるのとほぼ同時に大きな揺れがあった。

報道等で確認したところ、震源が静岡県であったので、「東北から離れた静岡で今の時期になぜ？」また、「東海地震ではないのか？」というような疑問を持ちながら、各隊の責任者を集め、情報収集にあたっている最中に、総務省消防庁から「富士宮市に出動できる福岡県隊の全車両は出動せよ」との緊急連絡が直接携帯電話にあった。

出動準備指示を行い、各隊グラウンドに駐車した車両でスタンバイし、まさに出動する直前に「大きな被害はなし。出動台数を絞れ」との指示があり、10台の車両のみ出動し、富士宮市消防本部に駆けつけたが、情報通りに幸い大きな被害はなく、活動なしで宿営地に午前2時過ぎに戻ってきた。

その頃、正式に「東北自動車道を北上し宮城県亘理町に向え」という指示と、被災地では各緊急消防援助隊が原発の状況を確認しながら依然として異常なく活動を行っている旨の情報が入った。

このとき宮城県の指揮支援部隊には、福岡県隊を亘理町に受け入れるという認識はなかったが、とにかく、宮城県に向かって進みながら、亘理町で活動中の愛知県隊の隊長と連絡をとり、放射線量を含めた現地の状況や活動状況を確認するとともに、その情報を福岡県隊全隊に

適宜情報提供しつつ進んだ。

福島県に入ると、放射線の測定数値が3マイクロシーベルト程度に一気に上昇するとともに気温もマイナス3度を示した。

東北自動車道は、原則緊急自動車のみ走行可能であり、渋滞等はなかったが、地震の影響で道が損傷を受けたところが徐々に増え出していった。

そんな中、「福岡県隊の活動場所は宮城県亶理郡山元町」と伝えられた。事前にたびたび行った亶理町に関する愛知県隊からの情報収集や福岡県隊全体への情報提供が全く無駄になってしまい残念であった。

東北自動車道を下り、一般道を走行し被災地に近づくにつれ、「福岡」からの消防車をみて、頭を下げてくれる人や道路の反対側から「ありがとう」と口を動かしながら手を合わせてくれる若い女性などもおられ、逆に力をいただきながら目的地を目指した。

被災地での活動

宿営地に到着し、現地消防本部の消防長などに迎えられた際、「すぐに活動したいので、搜索場所を指示して欲しい」旨を伝えたところ、「山元町災害対策本部の決定を踏まえた活動をしなければならないため、今日は宿営の準備等を行って欲しい。」とのことであった。

しかしながら、日暮れには時間的にも余裕があったことなどから、何らかの活動を実施させていただくことを強くお願いした結果、福岡県隊全員が交代で現地確認を出来ることとなった。これにより、翌日の活動に対する隊員の士気が高まったと感じた。

現地を調査した印象は、報道で目にする他地域の現場と異なり、流された家屋はほとんどその形を残しておらず、崩れ去っている状況であり、「この様な状況では、生存者は難しい…」と直感した。

一方、福岡県においては、県消防防災課及び各消防本部により、今後の活動についての会議が開催され、原発の状況、災害発生からの時間経過、

隊員の疲労状況などの種々の状況を踏まえ、検討の結果、活動は翌日の18日までと決定された旨の連絡を受けた。

この決定は、現況を熟慮された決定であったが、現地でしか感じる事の出来ない被災者の皆さんの福岡県隊に寄せる期待、現地消防本部職員の疲労度や思い、他県隊の活動状況、また、搜索未実施範囲の広さ、さらには、「とにかく遺体だけでも発見して欲しい。」という住民の思いなどを目の当たりにした我々にとっては、翌日までの活動というわけにはいかないというのが正直な気持ちであり、「翌日まで」という情報を得た隊員の中には、涙ぐむ者もいたほどであった。

このような現地特有の状況などを後方支援本部などに伝達した結果、活動期間を20日までと変更していただいた。

この日程変更には、局長や警防部長をはじめ多くの方にご迷惑をおかけしたが、おかげで様々な面で好結果をもたらしたと考えている。

翌日からの実際の活動においては、宿営地と活動現場が10km以上離れており、その移動時間が必要であった。また被災現場における道路の幅員の関係で、大型車両を活動エリアの近くまで配置できないことから救急車などによるピストン輸送を余儀なくされた。

余震も多く、津波による二次災害の危険があり、活動隊員の安全管理には最新の注意を払うとともに放射線値も1時間ごとに測定しながらの活動となった。

幸い、風向きが北風（山元町から原発方向に吹く風）が多かったため、最大で3マイクロシーベルトから4マイクロシーベルト程度であった。

現場は、まだ水が引いていない場所が多く足場も悪く、場所によっては、隊員が胸まで浸かった状況で搜索を行うなど、疲労度も高い搜索活動であった。

救急隊は、被災地の救急活動を基本として活動してもらい、昼と夜の2交代制をとり、主に避難所からの救急要請に出動し、遠くは仙台市までの搬送を行った。

避難所では、ヘルメットの「福岡」の文字を見

て「九州の福岡から来てくれたのですか？ ありがとう」との言葉を何度もかけられたとのことであった。

このような活動を3日間行い、最終日には亘理地区消防本部の消防長から全員に対し涙ながらの感謝の言葉をいただいた。

被災地から帰福まで

被災地を離れる時間は、帰路における航空機の時間の関係とそれぞれの消防本部の意向により、バラバラとなった。

この事については、「福岡に帰るまでは、県隊は一体で動くべき」との意見もあったが、それぞれの所属本部の意向もあり、宿舎で解隊式を実施し、その後は、各消防本部ごとの動きとなった。

出発から解隊式までの間、様々な形でバックアップしていただいた北九州市消防局、久留米広域消防本部を始め関係消防本部の皆さんに感謝の気持ちでいっぱいであった。

宿営地を出発後、これで帰って申し訳ないという気持ちと出来る事はやったという気持ちが織り混ざりながら被災地の中を進み、東北自動車道に向かった。

帰路については、後方支援本部が羽田空港から空路で帰福できるよう手配していただき、そのことだけでも安心することができた。また、最後の宿泊地である栃木県では、入浴施設にて入浴でき、かつ畳の上で寝ることができる宿泊場所を用意していただき、大変ありがたかった。

その他

出動した自分たちにはそれほど実感はなかったが、周辺の人たちから見ると、帰福後、しばらくの間、精神状態が通常とは若干異なっているところがあったようである。

活動内容により、隊員個々の差はあると思うが、若い隊員の中には、帰福後、活動等を思い出し、言葉に詰まる隊員などもいたことなどから、

やはりこのような通常とは異なる活動の場台は、活動終了後、早急なメンタルケアをしていただく必要性があったと思う。

終わりに

まずは、人員・車両等に事故なく福岡に帰って来れたことが何よりであり、責任者の一人として一番ほっとしたことである。

本来、緊急消防援助隊は、がれきの中から要救助者を救出し、応急処置を行い、病院に搬送することなどが基本的な任務であることから、現地へ出発した当初は、一定の日にちが経過した今になって我々が出動してどうなるのか？ という疑問も持っていた。

しかし、行方不明者（ご遺体）を発見し、ご家族の元へ届けられたことや、現地消防本部の通常消防・救急業務をお手伝いすることなどによって、被災地に対し幾ばくかの力になったのではないかと感じられ、このような被災地貢献の仕方もあるんだということを確認した。

今回は、本来の出動計画を大きく超えた活動であり、様々な経験をさせていただいたが、今後も首都直下地震、東海地震、東南海・南海地震の発生も危惧されており、有事の際には今回の経験を役立てていかなければならないと考える。

帰福後、報道機関により、我々が活動した山元町の特に幼稚園や小学校などにおいて生死の境で壮絶な活動が行われたことや残念ながら亡くなった子供がいたことを知った。

このような子供たちを含め犠牲になった方々のご冥福を心からお祈りいたします。

最後に、今回の出動で福岡市消防局の素晴らしさを改めて感じるとともに、後方支援本部等で様々な対応により出動隊をバックアップしてくださった、当時の尾原局長、関警防部長をはじめ、関係職員の皆様にこの場をお借りして、心から感謝を申し上げる次第です。本当にありがとうございます。

熊本県緊急消防援助隊救急隊 活動報告 ～この悔しさを今後に～

熊本市消防局 (熊本県)
消防司令
池松 英治



【はじめに】

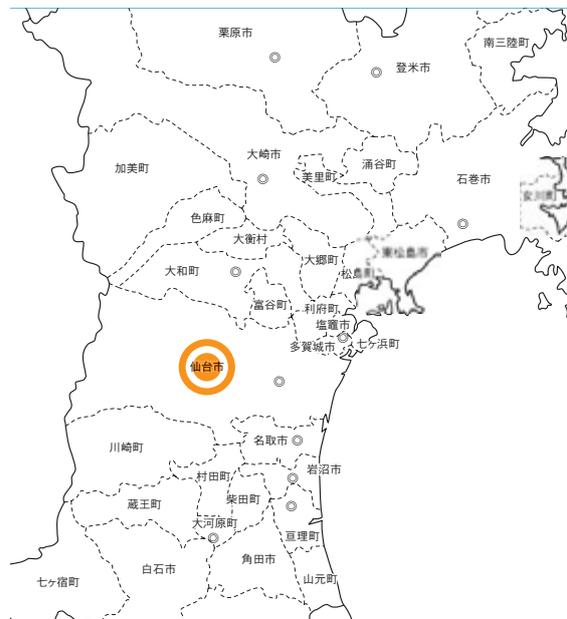
地震発生3日後、総務省消防庁からの出動指示を受け、熊本県緊急消防援助隊は、救急部隊7隊を含む29隊106名で編成された。熊本県隊では、活動の質を確保するため1次隊派遣後直ちに同規模の2次隊を編成した。1次隊は、平成23年3月14日(月)から18日(金)、2次隊は、18日から22日までの期間、それぞれが任務を遂行した。その派遣のなかで、両派遣救急隊が行った活動、救急隊員の想いについて、述べさせていただく。

【活動報告】

3月14日11時25分出動指示。15時45分熊本県隊集結。陸路、当初目的の東京都に向う。途中仮眠をとり、翌15日22時過ぎ、神奈川県消防学校に到着もつかの間、静岡県東部を震源とする震度6強の地震が発生し、緊張が走る。総務省消防庁から静岡県への出動準備の指示があり、約1時間後、要請取り消しとなる。想定外の災害対応に、あらゆる場面で混乱している様子が、我々活動部隊でも感じ取れた。

また、情報が錯綜し、「他県の緊急消防援助隊が移動中被ばくした。」という情報に、放射能に対する認識不足からか不安ばかりが先行し、様々なストレスが重なり冷静さに欠ける精神状態に追い詰められた。

3月16日、総務省消防庁から「宮城県気仙沼方



活動の場所:宮城県仙台市

面へ進出せよ。」との指示が出され、やっと活動拠点が決まったという気持ちと通過する際の放射能に対する不安が交錯しながら進出途中、仙台市への進出変更の指示が出る。夕刻、進出拠点を仙台市消防局泉消防署との決定連絡を受け、18時35分仙台市消防局泉消防署に到着する。到着後、明日の活動方針が伝えられた。

3月17日、札幌市消防局の指揮下に入り、仙台市若林区での捜索活動を開始する。捜索を開始してからまもなく1名の遺体を発見、予想を超える寒さのなか、さらに捜索を続ける。生存者の発見

を望むと同時に、1人でも多くの犠牲者を家族のもとに届けたいとの一心であった。しかし、それ以降の発見には至らず、15時、吹雪による天候不良のため活動終了を余儀なくされた。

3月18日、仙台市宮城野区で震災直後から発生している2ヶ所の火災の消火活動を行い、救急隊もそれぞれ消火活動の補助に従事する。この火災について、1ヶ所の倉庫火災は、鎮火させたが、もう1ヶ所の火災について鎮火に至らなかった。

一方、2次派遣隊は、空路で羽田空港まで行き、空港からはバスに分乗し陸路、仙台市へ向う。18時30分、仙台市消防局泉消防署に到着し、1次隊との引き継ぎを行う。引き継ぎの最後に、「救急隊として何もできなかった。」と悔しさを滲ませていたのが印象に残っている。

3月19日、2次隊活動開始。昨日鎮火に至らなかった消火活動の指示が与えられ、救急隊も現場に同行し消火活動の補助を行う。懸命の消火活動にもかかわらず、鎮火には至らなかった。救急出動の要請はなく、「与えられた任務を肅々と果たすだけ。」と自分に言い聞かせ活動を終えた。

3月20日、昨日と同じ現場で消火活動の補助を行っていたところ、救急要請の指令が入った。「施設間移送150名ほどの方が取り残されている。」との要請内容。救急隊は輝きを取り戻したかのように現場へと急ぐ。しかし、移送先の施設との調整がうまくいかず要請取り消し。それが最初で最後の救急要請であった。

午後、火災は鎮火し、消火活動は終了する。

同日、16時「熊本県緊急消防援助隊活動解除」の指示。

3月21日、仙台市消防局泉消防署を出発し帰路につく。

3月22日、九州自動車道吉志PAにて熊本県緊急消防援助隊解散。

【救急隊員の声】

3月11日の地震発生から、報道等で飛び込んで



宮城県仙台市 死傷者搬送状況

くる映像、情報は想像を絶するものであった。「この映像は映画であってほしい。」「この情報は嘘であってほしい。」と何度も願った。しかし、刻一刻と事態は悪化するばかり。このようななか、派遣された職員全員、1日でも早く被災地に入りたい、被災された方にできる限りの力になりたいと思った。我々の車列に向かって手を合わせる人、通り過ぎても深々と頭を下げている人の姿を目にしたとき、さらに“救急魂”に火が付いた。

しかし、前述のとおり救急隊としての活動は、被災地・被災された方々の期待には応えられるものではなかった。仕方がないことと分かっているも「悔しさ」だけが残る。多くの救急隊員が口にしてきた「何のために行ったのか、何かできることはなかったのか。」帰った後も自問が続いた。

緊急消防援助隊を含め、今回の震災対応の検証がこれから進められ、今後に向けた体制が整備されていくはずである。今、我々ができることは、今回経験したこと、感じたこと、得た教訓を機会あるごとに“伝える”ことだと思う。今後、起こり得る災害に備えるためにも。

【最後に】

被災しているにもかかわらず、熊本県隊の活動に際し、ご支援をいただきました仙台市消防局局長様はじめ職員の皆様には深く感謝いたしますとともに、被災地の1日も早い復興を心からお祈り申し上げます。

目の当たりにした未曾有の大震災と 釜石大槌地区での活動

宮崎県防災救急航空隊 (宮崎県)
隊員

加藤 啓一郎



平成23年3月11日、私たちは午後からの訓練を終え、空港に帰投したところ、事務所内で職員がテレビの前に集まっていた。

画面には地震発生を伝えるテロップと、ある港町が津波に押し流されている状況が放送されていた。私達は一目でただ事ではない事を認識し、緊急消防援助隊派遣に向けすぐに準備に取りかかった。

宮崎県にも津波警報が発令されたため、海岸沿いを上空から警戒活動を行った。程なくして総務省消防庁から出動要請が掛かったが、我が宮崎県防災ヘリは25時間飛行ごとの点検が控えており、当日には東北地方に向かうことはできなかった。早く助けに行きたくあきらめない悔しい気持ちはあったが、整備士の方達が徹夜で点検整備を済ませてくれたおかげで翌日の日の出と同時に宮崎空港を離陸することができ、一時集結場所である埼玉県の本田空港へ向かった。

途中、数回の給油を行い、岩手県での救助活動の指示を受け、夕方に花巻空港に着陸した。給油と出動準備中に釜石箱崎地区に出動の任務が掛かり、白浜小学校へ向かった。

いたる場所から地震による火災が発生しており

白煙が上がっているのが確認出来た。本当に被災地に来たのだと改めて実感した。白浜小学校は避難所になっており、避難住民の中の透析患者を搬送する目的だったが、すでに県警ヘリで搬送された後で、日没も迫っているために帰路についた。大槌上空を通過中、多数の人がビルの屋上や屋根の上で手を振っているのが目に入った。隊長の判断で2階建ての屋上に居る人を救助する事に決定し、私ともう1人の隊員2名で降下、優先順位を決めようとしていたが、話を聞くと建物内に20名以上の避難者がいることを聞いた。それに乳児も中にいる事が判明した。しかし航空救助では3名程度しか救助できない上に、乳児を救助できる資機材も無い。上空には自衛隊ヘリが待機していたのでパイロット同士で無線交信を行い、残りの方たちの救助を依頼し、私たちは負傷者を優先して救助活動を行った。

しかし救助はしたがどこに降ろしていいのかわからない。騒音響くヘリの中で新日鉄釜石サッカー場がある事を聞き、救助された方に案内してもらって着陸した。サッカー場にはすでに3機のヘリが着陸していた。もう一度さっきの場所に戻り救助したかったが、すでに周りは薄暗く帰投を余

儀なくされた。

この日以降、釜石大槌地区での活動のほか、陸前高田市、宮古市、大船渡市で捜索や孤立した病院からの救出、避難所への物資搬送、大津波警報発令時の広報活動等を行った。

今回の震災での活動の中で、土地勘が無かった事に加えて、無線や電話が繋がらないため入手できる情報も少なく、一事案に数機のヘリが向かうという非効率的な事態が発生するなど、災害に強い通信手段の確保が必要だと感じる事が多かった。

日本各地で近い将来必ず起こるといわれる大地震、その時のために今回の経験を忘れることなく、装備や支援設備の充実を図り、普段から防災に携わる一人の人間として防災教育や活動に活かしていきたい。

最後に、今回の東日本大震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りし、また、被災した全ての方々がいち早く通常の生活がおくれますようお願いしております。